『比較論理学研究』第7号
広島大学比較論理学プロジェクト研究センター
研究成果報告書 (2009)

# クシェーメーンドラ本「舎衛城神変説話」の源泉資料について*

山崎一穂

## 0.1 はじめに

仏教説話や律文献中には、世尊が布教や外道調伏といった種々の目的で神変（prātihārya）を起こしたという記述を見ることができる。舎衛城における世尊と外道の神変競争を描いた、「舎衛城神変説話」もその一つであり、この説話には南伝、北伝に多数の並行話が存在している。

本論はこのうち、最も後代に成立した、クシェーメーンドラ（Kṣemendra、ca. 990–1066）の仏教説話集 *Bodhisattvāvadānakalpalatā*（『菩薩の偉業の如意の蔓草』、以下 Av-klp）第14章 *Prātihāryāvadāna* 所収の「舎衛城神変説話」を取り上げ、その内容を『根本説一切有部律』及びパーリ、漢訳『賢愚経』等に伝承されている並行話の内容と比較検討することによって、クシェーメーンドラ本の源泉資料を解明するものである。

## 0.2 クシェーメーンドラ本「舎衛城神変説話」の構成

まず、本題に入る前に、クシェーメーンドラ本「舎衛城神変説話」の構成を見てみよう。クシェーメーンドラ本は anuṣṭubh を基調とする僅か61の詩節から成り[1]、当然ながら、その叙述内容は著

*本論文を著すに当たり、九州大学の岡野潔先生より、東北大学所蔵 Av-klp のダライラマ五世版のコピーを賜りました。茲に記して御礼申し上げます。

[1]本章で用いられている韻律は次の通りである。

- anuṣṭubh: 43 stanzas (70.49%)
  - pathyā: 68 half-stanzas (79.07%)
  - vipulā: 18 half-stanzas (20.93%)
    - na-vipulā: 9 half-stanzas (10.47%)
    - ma-vipulā: 4 half-stanzas (4.65%)
    - bha-vipulā: 5 half-stanzas (5.81%)
- vasantatilakā: 15 stanzas (24.59%)
- mālinī: 1 stanza (0.16%)
- śārdūlavikrīḍita: 2 stanzas (3.28%)

夙に Jacobi[1881] が指摘しているように、Kālidāsa（4–5世紀）以降のカーヴィア作品では、非正規形 anuṣṭubh（vipulā）の使用頻度が著しく低下するが（Hermann Jacobi, "Die Epen Kālidāsa's," *Congrès International des Orientalistes* 5 (1881): 136–137）、例外的にクシェーメーンドラが Av-klp において非正規形を多用したことは Straube [2006: 39–40] が指摘する通りである。Aśvaghoṣa（二世紀）の *Buddhacarita*（『仏陀の行跡』）と *Saundarananda*（『美しき人難陀』）では非正規形が11.7%（E. H. Johnston, *Aśvaghoṣa's Buddhacarita: Or Acts of the Buddha* (Lahore, 1936), lxvi）、Kālidāsa の代表作 *Kumārasambhava*（『軍神の誕生』）では、非正規形が10.26%、Bhāravi（六世紀）の *Kirātārjunīya*（『山の民とアルジュナとの戦闘』）では、非正規形が10%を占める（Carl Cappeller, *Bhāravi's Poem Kirātārjunīya: Or Arjuna's Combat with the Kirāta* (Cambridge, 1912), 193）。

しく簡潔である。以下に、クシェーメーンドラ本の構成要素を具体的に提示するならば、次の通りである。

(a) 主題提示、帰敬偈（v. 1）
(b) 外道、世尊に嫉みを抱き、マーラ（Māra）に憑依される（vv. 2–6）
(c) 外道、ビンビサーラ王（Bimbisāra）に訴え出る（vv. 7–9）
(d) プラセーナジット王（Prasenajit）、外道の申し出を受け、世尊に神通力合戦の件を通告する（vv. 10–28）
(e) カーラ（Kāla）太子譚（vv. 29–40）
(f) プラセーナジット王、神変舎を建立する（v. 41）
(g) 如意樹化作（v. 42）
(h) 放光（vv. 43–46）
(i) 化仏（vv. 47–49）
(j) 神々、世尊を祝福する（vv. 50–51）
(k) 世尊、法を説く（vv. 52–54）
(l) 有身見を捨てる民衆（v. 55）
(m) 外道、神変を示さず（v. 56）
(n) 外道、夜叉の怒りを受ける（v. 57）
(o) 世尊、三法帰依を説く（vv. 58–59）
(p) 世尊、法、布施、智慧、福徳の重要性を説き、王舎城に戻る（vv. 60–61）

## 0.3 「舎衛城神変説話」の類型化

次に、中川 [1982]、岡本 [2008] の先行研究を基に、「舎衛城神変説話」の諸伝本の説話構成要素とクシェーメーンドラ本のそれとを比較し、クシェーメーンドラ本がどの伝承に最も近いか検討してみよう。その際、比較の対象とする伝本は、以下の九伝本である。

- *Divyāvadāna*（Divy） 第 12 章 Prātihāryasūtra[2]　10 世紀頃[3]。
- *'dul ba phran tshegs kyi gzhi*[4]（蔵訳有部律）Vidyākaraprabha、Dharmaśrībhadra、dPal 'byor 訳 8–9 世紀頃。
- 『根本説一切有部毘奈耶雑事』（漢訳有部律）巻二十六[5]　義浄訳　710 年。
- 『賢愚経』巻二　降六師品第十四[6]　元魏・慧覚等訳　445 年。
- 『四分律』巻五十一[7]　仏陀耶舎訳　408 年。
- 『仏本行経』巻四現大神変品第二十[8]　宋・宝雲訳　424–453 年。

[2]Divy 143.1–166.28.

[3]Divy の成立年代に関する議論については、平岡 [2002: 135–139] を参照。但し、現存する写本伝承から Divy の成立年代を推定した場合、Divy の写本中には Av-klp から借用された幾つかの詩節が見られることから、その成立年代を 11 世紀以前に置くことはできない。Divy に借用されている Av-klp の詩節については、G. M. Bongard-Levin & O. F. Volkova, "The Kuṇāla Legend & An Unpublished Aśokāvadānamālā Manuscript," *Indian Studies Past & Present* 5 (1963): 117; Straube [2006: 88–89] を参照されたい。

[4]D#6, 40a1–53b5; P#1035, 37a8–50b2.

[5]T#1451, 329a1–333c14.

[6]T#202 360c14–366a10.

[7]T#1428 946b13–952b5.

[8]T#193 83c27–87a3.

- 『法句譬喩経』地獄品第三十[9]　西晋・法炬、法立訳　209–306 年。
- *Jātaka* #483 Sarabhamigajātaka[10]（Ja）成立年代不詳。
- *Dhammapadaṭṭhakathā* Yamakappāṭihāriyavatthu[11]（Dhp-a）450 年頃。

以上のうち、Divy の所伝は、後代に改竄を受けたと思われる形跡があるものの[12]、中川 [1982] が指摘するように、物語の主な構成要素は蔵漢訳『有部律』の所伝とほぼ一致する[13]。従って、これら三伝本を Divy 系伝本、残り六伝本を非 Divy 系伝本と呼ぶことにする。この分類に従ってクシェーメーンドラ本をいずれかに分類するならば、クシェーメーンドラ本は、明らかに Divy 系統に属することが知られる。何故なら、クシェーメーンドラ本は、先に 2 で挙げた要素のうち、次の要素を全て同じ順序で Divy ないしは、蔵漢訳『有部律』と共有しているからである。

(b)「外道、世尊に嫉みを抱き、マーラに憑依される」(Divy 143.9–144.19; D40a3–40b4; P37b2–38a4; T329a5–329b19)
(c)「外道、ビンビサーラ王に訴え出る」(Divy 145.22–146.21; D41a4–41b1; P38c3–8; T329b19–26)
(d)「プラセーナジット王、外道の申し出を受け、世尊に神通力合戦の件を通告する」(Divy 149.24–150.7; D42a5–7; P39b5–7; T329c16–20)
(e)「カーラ太子譚」(Divy 153.22–155.12; D44a3–45a5; P41b1–42b5; T330b14–330c25)
(f)「プラセーナジット王、神変舎を建立する」(Divy 150.30–151.2)
(h)「放光」(Divy 157.5–20)
(i)「化仏」(Divy 162.9–19; D50b3–51a3; P47b8–48a8; T332b10–21)
(j)「神々、世尊を祝福する」(D51a7; P48b5–6; T332b29–c3)
(l)「有身見を捨てる民衆」(D48a4–6; P45b2–4; T331c15–17)
(m)「外道、神変を示さず」(Divy 163.10–17; D51b5–52a1; P49a2–5; T332c16–22)
(o)「世尊、三法帰依を説く」(Divy 164.7–16; D52a3–6; P49a8–49b3; T333a1–10)

上記のうち、下線で示した要素 (b)「世尊出現により供養されなくなった外道に憑依するマーラ」、要素 (e)「カーラ太子譚」、要素 (k)「世尊、三法帰依を説く」、要素 (l)「有身見を捨てる民衆」は、Divy 系伝本に固有な伝承である。従って、クシェーメーンドラ本がこれらの要素を保持していることは、クシェーメーンドラが有部の伝承を参照していたことを意味する。以下にその事例を具体的に見てみよう。

## 0.4　有部の伝承と共通する要素

### 0.4.1　世尊出現により供養されなくなった外道に憑依するマーラ

まず、Divy と Av-klp の所伝の冒頭部を見比べてみよう。中川 [1982] が指摘するように、Divy 系伝本は、六師外道が世尊に神通力合戦を申し込んだ理由を、外道達が世尊の出現後、在家者から重んじられず、供養を受けられなくなったために彼に嫉みを抱き、マーラに憑依されたことに置いている点に特徴が見られる。

[9]T#211 598c1–599c18.
[10]Ja 263.6–275.7.
[11]Dhp-a 199.7–230.14.
[12]Divy に見られる改竄部分としては、例えば、「プラセーナジット王による神変舎建立の申し出」(Divy 150.30–151.2)、「放光する世尊」(Divy 157.5–20) 等が挙げられるだろう。Divy と蔵漢訳『有部律』に見られる相違点については、平岡 [2007: 289ff] を参照されたい。
[13]以下、蔵漢訳『有部律』の原典を引用する場合は、両者の記述が Divy の記述と逐語的に一致しない場合にのみ注記し、一致する場合は省略する。

## 世尊に妬みを抱く外道

Divy では、世尊の出現により、在家者から供養されなくなった六師外道達が世尊に妬みを抱いたことが、次のように述べられる。

**[Divy 143.9–144.14]** [14]

(I) tena khalu samayena rājagṛhe nagare ṣaṭ pūraṇādyāḥ śāstāro 'sarvajñāḥ sarvajñamāninaḥ prativasanti sma tadyathā pūraṇaḥ kāśyapo maskarī gośālīputraḥ saṃjayī vairaṭṭīputro 'jitaḥ keśakambalaḥ kakudaḥ kātyāyano nirgrantho jñātiputraḥ | atha ṣaṇṇāṃ pūraṇādīnāṃ tīrthyānāṃ kutūhalaśālāyāṃ saṃniṣaṇṇānāṃ saṃnipatitānām ayam evaṃrūpo 'bhūd antarā kathāsamudāhāraḥ |

(II) yat khalu bhavanto jānīran yadā śramaṇo gautamo loke 'nutpannas tadā vayaṃ satkṛtāś cābhūvan gurukṛtāś ca mānitāś ca pūjitāś ca rājñāṃ rājamātrāṇāṃ brāhmaṇānāṃ gṛhapatīnāṃ naigamānāṃ jānapadānāṃ śreṣṭhīnāṃ sārthavāhānām lābhinaś cābhūvaṃś cīvarapiṇḍapātaśayanāsanaglānapratyayabhaiṣajyapariṣkārāṇām | yadā tu śramaṇo gautamo loke utpannas tadā śramaṇo gautamaḥ satkṛto gurukṛto mānitaḥ pūjito rājñāṃ rājamātrāṇāṃ brāhmaṇānāṃ gṛhapatīnāṃ janapadānāṃ dhanīnāṃ śreṣṭhīnāṃ sārthavāhānām lābhī ca śramaṇo gautamaḥ saśrāvakasaṃghaś cīvarapiṇḍapātaśayanāsanaglānapratyayabhaiṣajyapariṣkārāṇām | asmākaṃ ca lābhasatkāraḥ sarveṇa sarvaṃ samucchinnaḥ |

(III) vayaṃ sma ṛddhimanto jñānavādinaḥ | śramaṇo 'pi gautamo ṛddhimāñ jñānavādīty ātmānaṃ pratijānīte | arhati jñānavādī jñānavādinā sārdham uttare manuṣyadharme ṛddhiprātihāryaṃ vidarśayitum |

(IV) yady ekaṃ śramaṇo gautamo 'nuttare manuṣyadharme ṛddhiprātihāryaṃ vidarśayiṣyati vayaṃ dve | dve śramaṇo gautamo vayaṃ catvāri | catvāri śramaṇo gautamo vayam aṣṭau | aṣṭau śramaṇo gautamo vayaṃ ṣoḍaśa | ṣoḍaśa śramaṇo gautamo vayaṃ dvātriṃśad iti yāvac chramaṇo gautama uttare manuṣyadharme ṛddhiprātihāryaṃ vidarśayiṣyati vayaṃ taddviguṇaṃ tattriguṇaṃ vidarśayiṣyāma upārdhaṃ mārgaṃ śramaṇo gautama āgacchatu vayam apy upārdhaṃ mārgaṃ gamiṣyāmaḥ | tatrāsmākaṃ bhavatu śramaṇena gautamena sārdham uttare manuṣyadharme ṛddhiprātihāryam |

(I) さてその時、王舎城の都城には、プーラナ（Pūraṇa）を始めとする一切知者でもないのに一切知者と思い込んでいる、六師が住んでいた。即ち、プーラナ・カーシュヤパ（Pūraṇa Kāśyapa）、マスカーリン・ゴーサリープトラ（Maskārin Gośalīputra）、サンジャイン・ヴァイラッティープトラ（Saṃjayin Vairaṭṭīputra）、アジタ・ケーシャカンバラ（Ajita Keśakambala）、カクダ・カーティアーヤナ（Kakuda Kātyāyana）、ニルグランタ・ジュナーティプトラ（Nirgrantha Jñātiputra）である。さて、プーラナを始めとする六人の外道が、討論のホールに集まり、座していると、〔彼等の〕間に次のような討論と議論が持ち上がった。

(II)「実に次のことを貴方方は知るべきだ。沙門ガウタマが未だこの世に現れていなかった時、我々は王達、大臣達、バラモン達、長者達、都市民達、地方民達、組合長達、隊商達にもてなされ、重んぜられ、敬われ、供養され、そして衣、鉢、臥具と座具、病気の治療薬といった供養の品々を得ていた。しかし、沙門ガウタマがこの世に現れ

[14]以下、Divy、パーリ伝本、漢訳経典及び国訳一切経の原文を引用する際、便宜上小節毎にローマ数字の番号を付したが、これは筆者によるものである。

ると、沙門ガウタマが、王達、大臣達、バラモン達、資産家達、地方民達、資産家達、組合長達、隊商達にもてなされ、重んぜられ、敬われ、供養されるようになった。そして、沙門ガウタマは、声聞や僧団とともに、衣、鉢、臥具と座具、病気の治療薬といった供養の品々を得ている。我々に対する利と尊敬は完全に失われてしまった。」

(III)「我々こそが神通力を備え、知に基づいて語る者達である。沙門ガウタマも神通力を備え、知に基づいて語る者だと自認している。知に基づいて語る者は、知に基づいて語る者と一緒に、人間の優れた性質に基づいて、神通神変を示すに値する。」

(IV)「もし沙門ガウタマが、人間の優れた性質に基づいて、一つの神通神変をを示そうものなら[15]、我々は二つ、沙門ガウタマが二つなら、我々は四つというように、沙門ガウタマが人間の優れた性質に基づいて、神通神変を示す限り、我々は〔人間の優れた性質に基づいて、神通神変を〕その二倍、三倍示そうではないか。沙門ガウタマは道半ばまでやって来るなら来い。我々も道半ばまで行くだろう。そこで沙門ガウタマと一緒に我々は人間の優れた性質に基づいて、神通神変を持つべきである。」

以上のように、Divy の所伝では、プーラナ達が世尊の出現により供養されなくなったことに不満を抱き (I)–(II)、神変競争を目的に世尊を呼び出し、彼を負かそうと目論んだこと (III)–(IV) が述べられる。

これに相当する、クシェーメーンドラ本の記述は次の通りである。

**[Av-klp 14.2–3]**

pure rājagṛhābhikhye bimbisāreṇa bhūbhujā |
pūjyamānaṃ jinaṃ dṛṣṭvā sthitaṃ veṇuvanāśrame || 14.2 ||

mātsaryaviṣasaṃtaptā mūrkhāḥ sarvajñamāninaḥ |
na sehire tadutkarṣaṃ prakāśam iva kauśikāḥ || 14.3 ||

(2) 王舎城という都城の竹林精舎に滞在していた勝者が、ビンビサーラ王に供養されているのを見て、〔自分を〕一切知者だと思い込んでいる愚か者達は、(3) 嫉みという毒の熱に苛まれ、彼の卓越性に耐えられなくなった。恰も梟が光〔に耐えられない〕ように。

クシェーメーンドラ本は、やや説明に乏しいものの、Divy の (I)–(II) に相当する内容の記述を、第 2–3 詩節に等しく保持していることが知られる。

## マーラの憑依

Divy における、外道達にマーラが憑依する場面の記述は、次の通りである。

**[Divy 144.14–19]**

atha mārasya pāpīyasa etad abhavat | asakṛd asakṛn mayā śramaṇasya gautamasya parākrāntam na ca kadācid avatāro labdhaḥ | yan nv ahaṃ tīrthyānāṃ prahareyam iti viditvā pūraṇavad ātmānam abhinirmāya uparivihāyasam abhyudgamya jvalanatapanavarṣaṇavidyotanaprātihāryāṇi kṛtvā maskariṇaṃ gośālīputram āmantrayate |

[15]「人間の優れた性質に基づいた、神通神変」(uttare manṣyadharme ṛddhiprātihārya) については平岡 [2007: 290–291] を参照されたい。Burnouf [1876: 146, fn. 1] は "transformation surnaturelle dans la loi supérieure de l'homme"（人間の優れた法における神通の変化）の訳語を当てる。

さて、邪悪なマーラに次のような〔思いが〕生じた。「幾度も幾度も私は沙門ガウタマに目をつけていたが、片時も弱みを握ることがなかった。それだから、今こそ私は外道達を害そう。」と考え、プーラナそっくりに自分を化作してから、空の上に現われて、火焔と光と雨と稲妻の神変をなしてから、マスカーリン・ゴーサーラに言った[1)]。

これに対応するクシェーメーンドラ本の記述は、次の通りである。

**[Av-klp 14.5–6]**

maskarī saṃjayī vairair ajitaḥ kakudas tathā |
pūraṇajñātiputrādyā mūrkhāḥ kṣapaṇakāḥ pare || 14.5 ||

ūcur nṛpatim abhyetya māramāyāvimohitāḥ |
saṃgharṣadveṣadoṣeṇa dhūmenevāndhakāritāḥ || 14.6 ||

(5) マスカーリン、サンジャイン、アジタ、カクダ、及びプーラナ、ジュナーティプトラを始めとする、その他の愚かな苦行者達は、敵意を抱き、(6) 恰も煙で目が見えなくなった人のように、マーラの幻力で迷いを生じ、競争心と憎しみという過失の故に、〔ビンビサーラ〕王のもとへ行って述べた。

クシェーメーンドラ本も Divy の所伝と同じく、第六詩節において、外道へのマーラの憑依を述べていることが知られる。

これに対し、パーリ及び『賢愚経』を始めとする諸伝本の所伝は、以下の点で Divy 系伝本と相違を見せる。

まず、パーリ二伝本及び『四分律』の所伝は、外道の挑戦原因を「世尊が比丘の神通力の行使を禁じたこと」に置き、「マーラの憑依」に関する記述を欠いている。すなわち、Ja の所伝では、次のように述べられる。

**[Ja 263.12–23]**

---

1)蔵漢訳『有部律』の記述は、「六師が住していた」という記述の後にマーラの術現に関する記述が入り、「人間の優れた性質に基づいて、神通神変を示せばよい」という記述の後にマーラの術現の記述が入る Skt. と順序を異にする。また、冒頭部の記述が Skt. と厳密に一致せず、次のように述べられる。
[D40a3–6; P37b2–5] | mu stegs rnams ni rgyal po dang | blon po dang | bram ze dang | khyim bdag dang | grong mi dang | ljongs kyi mi dang | phyug po dang | tshong dpon dang | ded dpon rnams kyis rim gro ma byas | bla mar ma byas | phyu dud ma byas | mchod pa ma byas pas chos gos dang | bsod snyoms dang | mal ston dang | nad gsos kyi rkyen sman dang | yo byad rnams kyang ma rnyed par gyur to | de nas bdud sdig can 'di snyam du bdag gis yun ring po nas dge sbyong gau ta ma la rnam par mtho btsams( ] D; tho brtsams P) na glags ma rnyed kyis ma la bdag gis mu stegs rnams la rnam par mtho btsam( ] D; tho brtsams P) mo rnyam mo | de'i tshe rdzogs byed la sogs pa ston pa drug po thams cad mkhyen ma yin par thams cad mkhyen par nga( ] P; om. D) rgyal byed pa rnams rgyal po'i kab na rten cing 'khod do |「外道達は、王、大臣、バラモン、長者、村人、地方民、資産家、隊商主達に仕えられ、重んぜられ、敬われ、供養されなくなったので、衣、鉢、寝具、病の治療薬や諸々の供養の品を得られなくなった。その時、かのマーラは、「私は長い間沙門ガウタマを害する機会を得なかったので、さて、私は外道達を悩ませてやろう。」と考えた。その時、プーラナを始めとする一切知者でもないのに、一切知者だと思い込んでいる六人の師は、王舎城に留まって、住していた。」
[T329a5–14] 然諸外道不蒙王臣婆羅門等之所恭敬。不獲飲食乃至資身之物。時魔王波旬作如是念。我於長夜悩喬答摩不能得便。我今宜可於諸外道而為悩乱。是時六師晡刺拏等。非一切智作一切智慢。亦於王舎城依止而住。(西本 [1935: 446]「然も諸外道は王臣婆羅門等の恭敬する所たらざりければ、飲食乃至資身の物を獲ざりき。時に魔王波旬は是の如き念を作さく、「我長夜に於て喬答摩を悩まさんとして便を得ること能はざれば、我れ今宜しく諸外道に於て而し悩乱を為すべし」と。是時六師晡刺拏等は一切智に非ざるに一切智慢を作し、亦王舎城に於て依止して住せり。」)

(I) tadā titthiyā "paṭikkhittaṃ samaṇena gotamena iddhipāṭihāriyakāraṇaṃ, idāni sayam pi na karissatīti" cintetvā

(II) maṃkubhūtehi attano sāvakehi "kiṃ bhante iddhiyā pattaṃ na gaṇhitthā" ti vuccamānā "n' etaṃ āvuso amhākaṃ dukkaraṃ chavassa pana dāruppattass' atthāya attano saṇhasukhumaguṇaṃ ko gihīnaṃ pakāsessatīti na gaṇhimha, samaṇā pana sakyaputtiyā lolabālatāya iddhiṃ dassetvā gaṇhiṃsu, mā "amhākaṃ iddhikaraṇaṃ bhāro" ti cintayittha, mayaṃ hi, tiṭṭhantu samaṇassa gotamassa sāvakā,

(III) ākaṃkhamānā pana samaṇena gotamen' eva saddhiṃ iddhim pi dasseyyāma, sace hi samaṇo gotamo ekaṃ pāṭihāriyaṃ karissati mayaṃ diguṇaṃ karissāmā" ti kathayiṃsu.

(I) その時、外道達は「沙門ガウタマは神通神変を行使することを禁止した。もはや、自らも〔神通神変を〕起こしはすまい。」と考えた。

(II) すると、困惑した自身の弟子達に「尊者よ、何故神通力を用いて鉢を受け取らなかったのですか。」と言われた。そこで、〔彼等は〕「長老達よ、それ（神通力の行使）は我々のなし難いことではない。しかし、『つまらぬ木の鉢の為に、自分の繊細で微妙なすぐれた性質を誰が在家者に示したりしようか。』と考えて、〔我々は鉢を〕受け取らなかったのだ。しかし、仏弟子の沙門達は、欲深さと愚かさの故に、神通力を示して〔鉢を〕受け取った。『我々には神通力を起こすことは難しいのだ。』などと考えてはならぬ。沙門ガウタマの弟子は放っておけ。」

(III)「実に我々は、求めさえすれば、沙門ガウタマと一緒に神通力を示すことができる。もし沙門ガウタマが一つの神変を行使するなら、我々は二倍〔の神通力〕を行使しよう。」と語った。

Dhp-a の所伝は、Ja に比べ幾らか詳細であるが、Ja の (I)–(III) に語られる内容とほぼ同じものを、同じく以下の (I)–(III) に見出すことができる。

**[Dhp-a 204.1–13]**

(I) titthiyā "samaṇo kira gotamo taṃ pattaṃ bhedāpetvā pāṭihāriyassa akaraṇatthāya sāvakānaṃ sikkhāpadaṃ paññāpesī" ti sutvā "samaṇassa gotamassa sāvakā paññattaṃ sikkhāpadaṃ jīvitahetu pi nātikkamanti, samaṇo pi gotamo taṃ rakkhissat' eva, idāni amhehi okāso laddho" ti

(II) te nagaravīthisu ārocentā vicariṃsu: "mayaṃ attano gunaṃ rakkhantā pubbe dārumayapattassa kāraṇā attano guṇaṃ mahājanassa na dassayiṃha, samaṇassa gotamassa sāvakā ettakamattassa kāraṇā attano guṇam mahājanassa dassesum, samaṇo gotamo attano paṇḍitatā ya taṃ pattaṃ bhedāpetvā sāvakānaṃ sikkhāpadaṃ paññāpesi kira,

(III) idāni mayaṃ ten 'eva saddhiṃ pāṭihāriyaṃ karissāmā" ti.

(I) 外道達は「沙門ガウタマは、聞く所では、あの鉢を壊させて、神変の行使を禁ずる為に、声聞達に規則を宣言したそうだ。」と聞いて、「沙門ガウタマの声聞達は制定された規則を、生活を営む為であろうとも、破りはしない。実に沙門ガウタマもそれを守るであろう。今や、我々は機会を得たのだ。」と〔考えた〕。

(II) 彼等は街路で声を上げながら歩き廻った。「我々は自分達の徳を秘めているので、前に、木製の鉢の為に自分達の持っている偉大な人間の徳を示したりしなかったのだ。沙門ガウタマの声聞達は、それだけの為に、自分達の徳を群衆に示した。沙門ガウタマは自分の学ある所を用いて、あの鉢を壊させてから、声聞達に規則を宣言したと言われている。」

(III)「今や、我々は彼（世尊）一人と一緒に神変をなすだろう。」と。

『四分律』の記述も、Ja 及び Dhp-a に見られる (I)「外道達が、世尊が比丘の神通力の行使を禁じたこと」、(III)「外道達が世尊に神変争いを布告したこと」を、以下 (I)–(II) において、等しく述べている。

**[四分律 T946c25–947a1]**

(I) 時諸外道聞沙門瞿曇制諸比丘不得於白衣前現神足。彼沙門所制終不更犯[2)]。

(II) 我等今寧可往彼所語言。汝沙門瞿曇自称得阿羅漢。我亦是阿羅漢。自称有神通。我亦有神通。自称有大智慧。我亦有大智慧。今可共現過人法神力[3)]。

次に、『賢愚経』、『仏本行経』の所伝を見てみよう。両所伝は、以下のように、「外道へのマーラの憑依」に関する記述を含む点では、Divy 系伝本と共通している。

**[賢愚経 T361b2–11]**

天魔波旬。懼其情怯。不能宣布悪邪之毒即下化作六師之形。於一人前。現五人術。飛行空中。身出水火。分身散体。百種現変。愚痴之徒。更相恃頼。忿前見辱亡失供養。六師悉集。各共議言。我曹技能。不減瞿曇。縁前一辱。衆心離散。比来衆師。神術顕変。今察奇妙。足任伏彼。当詣国王求決勝負。作議已定[4)]。

**[仏本行経 T84c6–11]**

魔天其夜　詣諸異学　欲以威神　令意喜悦　各各一一　至其廬窟　自変形容　如其弟子　自投其身　不蘭足下　我真実是　聖師弟子　又復往至　餘五人所　遍往行詣　欺誑六人[5)]

しかし『賢愚経』の所伝は、次の点で、外道の挑戦原因を Divy 系伝本と異にしている。

**[賢愚経 T360c28–361b2]**

(I) 許王之後辦設供具。饒敷床座。事訖設会。遣人往喚。六師之徒。尋皆来集。坐於上位。怪仏及僧不自来至。即往白王。王前数数。勅請瞿曇。今為設会。日時欲至。如何不来。王告弟言。汝雖不能躬自往請。可遣一人白於時到。王弟受教遣人白。時仏与大衆。来至会所。見諸六師先坐上座。仏与衆僧。次第而坐[6)]。

---

[2)](I) 境野 [1933: 1215]「時に諸の外道、沙門瞿曇、諸の比丘の、白衣の前に於て神足を現ずることを得ずと制したまふ、彼の沙門の所制終に更も犯さずと聞き、」

[3)](II) 境野 [1933: 1215]「我等今寧ろ彼の所に往き、語りて言ふべし、『汝沙門瞿曇、自ら阿羅漢を得たりと称す、我れも亦た是れ阿羅漢なり、自ら神通ありと称せば、我れも亦た神通あり、自ら大智慧ありと称す。我れも亦大智慧あり、今共に過人法の神力を現ずべし」

[4)]赤沼・西尾 [1930: 108]「天魔波旬其の其情怯を懼れ悪邪の毒を宣布すること能はず、即ち下りて六師の形を化作し一人の前に於て五人の術を現ず。空中を飛行し、身水火を出し、身を分て体を散じ百種に現じ変ず。愚痴の徒更に相ひ恃頼す。前に辱しめられ供養を亡失するを忿り六師悉く集る。各共に議して言く『我曹技能瞿曇に滅ぜず前の一辱に縁り衆心離散す。比来、衆師神術変を顕はし今奇妙を察するに彼を任伏するに足らむ。当に国王に詣り勝負を決せむと求むべし』と。議を作し已り定まる。」

[5)]魔天其の夜、諸の異学に詣り、威神を以て、意を喜悦令しめんと欲して、各各一一、其の廬窟に至り、自ら形容を変して、其の弟子の如し。自ら其の身を不蘭の足下に投じ、我は真実は是れ、聖師の弟子なり、と。又復、餘の五人所に往至り、遍往行詣、六人を欺誑き

[6)](I) 赤沼・西尾 [1930: 40–41]「王に許ふの後供具を辦設し饒く床座を敷く。事訖り会を設く。人を遣はし往喚す。六師の徒尋いで皆来集し上位に坐ず。仏及び僧自ら来至せざるを怪しむ。即ち往きて王に白さく「王、前に数数勅して瞿曇を請ぜよと云ふ。今為めに会を設く。日時至らむと欲し如何にして来らず」と。王、弟に告げて言く「汝、躬自ら往請すること能はずと雖も一人を遣はし時の到るを白すべし」と。王弟教を受け人を遣はし白す。時に仏、大衆と与に会所に来至り給ふ。諸の六師先に上座に座にるを見、仏、衆僧と与に次第して坐し、」

(II) 仏以神足。令此六師合其徒類。忽在下行。六師情恥。各起移坐。坐定自見。還在其下。如是再三。移坐就上。猶自見身。乃在下末。更無力能。俛仰而坐。檀越行水。至上座前。仏語施主。先与汝師。持水往師前。即挙罌。罌口自閉。其水不下。還往仏前。従仏作次。爾乃水出。鹹得洗手。洗手既竟。次当呪願。檀越捉食。在上座前。仏語檀越。本不為我。往汝師前。自令呪願。受教尋往。至六師所。六師口噤。不得出言。但各挙手。遥指於仏。仏便呪願。梵音声暢。呪願既竟。次当行食。欲随上座。作次付之。仏又告言。先与汝師。即便持食。従六師付。食皆忽上。住虚空中。各当其上。取不可得。行食与仏并僧遍訖。食乃還下。各在其前。仏与衆僧。一切食訖。澡漱還坐[7]。

(III) 次当説法。仏語檀越。令汝師説。尋請六師。六師復噤。但各同時。挙手指仏。於是如来。広為衆会。出柔軟音。暢演法性。分別義理。応適衆情。聞仏説法。鹹得開解。洴沙王弟。得法眼浄。其餘衆人。或得初果。至第三果。出家尽漏。発無上心。住不退地[8]。

(IV) 随心所慕。悉得其願。各乃識真。信敬三宝。薄賤六師。捨不承供。於是六師。甚懐悩恚。各至閑静。求学奇術[9]。

すなわち、外道達が以前受けていた供養を受けられなくなり、世尊に妬みを抱いたこと((IV))の背景に、招かれた供養の席で((I))、世尊が種々の神変を用いて、外道が供養されるのを妨げた上、王弟を改宗させた((II)–(III))という事実があったことを述べているのであるが、このような背景があったことは、Divy系伝本では全く述べられていない。

『仏本行経』の所伝は、外道達の挑戦原因を、「(I) 外道達が自分達の知性に自惚れ、(II) 世尊に対抗心を抱いたこと」に置く点で、Divy系伝本と相違している。すなわち、以下の通りである。

**[仏本行経 84b22–84c6]**

(I) 豊秋賢善　并与迦葉　厥性質直　名曰審諦　身体妙挺　巍巍可畏　所学聡疾
明達踰師　視世学人　猶如草穢　又自矜高　意常求敵　言辞臨衆　譬如酔客[10]

(II) 得至釈子　皆沈著地　自居如象　過猛師子　吾唯一事　可以勝之　偏当以此
得伏子耳　若能爾時必得勝子　名称可畏　又増利養　唯可請仏　令現神変　子性少

---

[7](II) 赤沼・西尾 [1930: 41]「仏、神足を以て此の六師をして其の徒類と合し忽ち下に行いて在らしめ給ふ。六師、情恥ぢ各起つて坐を移す。坐定り自ら見るに還び其の下に在り、是の如く再三坐を移し上に就く。猶自ら身を見るに、乃ち下末に在り。更に力能無し。俛仰して坐す。檀越水を行す、上座の前に至る。仏、施主に語るらく。「先に汝の師に与へよ」と。水を持ち師の前に往く。即ち罌を挙ぐ、罌の口自ら閉ぢ其の水下らず。還び仏前に往く。仏より次と作す。爾らば乃ち水出でて、鹹手を洗ふことを得たり。手を洗ふこと既に竟る。次に当に呪願すべし。檀越食を捉り上座の前に在り、仏、檀越に語り給ふやう。「本我が為にせず。汝の師の前に往きて自ら呪願せしめよ。」教を受け尋いで往き、六師の所に至る。六師口を噤み言を出すを得ず。但、各手を挙げ遥に仏を指す。仏、便ち呪願し給ふに梵音の声暢ぶ。呪願既に竟る。次に食を行ふべし。上座に随つて次と作し之を付へむと欲す。仏、又告げて言く「汝の師に与へよ」と。即便ち食を持ち六師に従ひ付ふ。食皆忽ち上りて虚空の中に住す。各其の上に当り取り得べからず。食を行し仏并びに僧と遍く訖り、食乃ち還び下り各其の前に在り。仏、衆僧と一切の食訖り澡漱ぎ還び坐す。」

[8](III) 赤沼・西尾 [1930: 41]「次に説法すべきなり。仏、檀越に語り給ふやう「汝の師をして説かしめよ」と。尋いで六師を請ず。六師、復噤む。但各同時に手を挙げ仏を指す。是に於て如来広く衆会の為に柔軟の音を出し法性に暢演し義理を分別し衆情に応適せしめ給ふ。仏の説法を聞き咸開解を得。洴沙王弟法眼浄を得其の餘の衆人或は初果を得第三果に至る。出家し漏を尽し無上心を発し不退地に住す。」

[9](IV) 赤沼・西尾 [1930: 41–42]「心の慕ふ所に随ひ悉く其の願を得、各乃ち真を識り三宝を信敬す。六師を薄賤し捨てて供を承げず。是に於て六師甚だ悩恚を懐き各閑静に至り奇術を求学す。」

[10](I) 豊秋賢善并びに迦葉とは、厥の性、質直にして、名づけて審諦と曰ふ。身体妙挺、巍巍たること畏るべし。学ぶ所は聡疾にして、明達の師を踰へ、世の学人を視ること、猶草穢の如し。又自ら矜高し、意に常に敵を求む。言辞衆に臨むこと、譬へば酔客の如し。

求　又喜慚愧　毎勅弟子　不現神足　若不現変　則負吾等[11)]

『法句譬喩経』の所伝は、外道の挑戦原因についてはDivy系伝本のそれに同じであるが、「外道へのマーラの憑依」に関する記述は見られない。すなわち、次の通りである。

**[法句譬喩経 T598c2–6]**

昔舎衛国有婆羅門師。名富蘭迦葉。与五百弟子相随。国王人民先共奉事。仏初得道与諸弟子従羅閲祇至舎衛国。身相顕赫道教弘美。国王中宮率土人民莫不奉敬。於是富蘭迦葉起嫉妬意。欲毀世尊独望敬事[12)]。

以上の点から、クシェーメーンドラ本とDivy系伝本は、外道の挑戦理由に関して、等しい伝承を保持していることが知られる。

### 0.4.2　カーラ太子譚

次に、プラセーナジット王弟カーラに関する挿話を見てみよう。中川[1982]が指摘するように、王弟カーラに関する挿話はDivy系伝本にのみ見られ、パーリ及び『賢愚経』を始めとする漢訳の所伝には見られない。ところが、Av-klpの所伝を見ると、Divy系伝本と全く同内容のものを見ることができる。この挿話は稍長いので、両者の要点を抜粋して示すならば、次の通りである。

#### 王妃の花環を手にするカーラ太子

王宮を散策していたカーラ太子は、図らずも後宮から落ちてきた花環を手にするのであるが、相当するDivyの記述は次の通りである。

**[Divy 153.22–25]**

sa rājñaḥ prasenajitaḥ kauśalasya niveśanadvāreṇābhiniṣkrāmati | anyatamayā cāvaruddhikayā prāsādatalagatayā rājakumāraṃ dṛṣṭvā sragdāmaṃ kṣiptam | tat tasyopari nipatitam |

彼はコーサラ国王プラセーナジットの住処の門をくぐって、外に出た。すると、宮殿の屋上にいた後宮の女の一人が太子を見て、花環を投げた。それは彼の上に落ちた[13)]。

---

[11)](II) 釈子に至ることを得ては、皆沈めて地に著く。自居すること象の如く、猛き師子よりも過たり。吾唯だ一事のみあり、以て之に勝るべし、偏に当に此を以て、子を伏するを得んのみ。若し能く爾の時、必ず子に勝つことを得ば、名称畏るべし、又利養を増さん。唯仏に請ひて、現ぜ神変を令むべし。子の性、少求にして、又慚愧を喜び、毎に弟子を勅て、神足を現ぜしめず。若し変を現ぜざれば、則ち吾等に負けん。

[12)]赤沼ほか[1930: 305]「昔、舎衛国に婆羅門の師有り。富蘭迦葉と名づく。五百の弟子と相ひ随ふ。国王、人民、奉事せざるは莫し。仏、初め道を得諸の弟子と与に羅閲祇より舎衛国に至り給ふ。身相顕赫し道教清美なり。国王、宮中・率土の人民奉敬せざるは莫し。是に於て、富蘭迦葉嫉妬の意を起し世尊を毀りて独り敬事を望まむと欲し、」

[13)]蔵漢訳『有部律』の記述は次の通り。

[D44a3–4; P41b1–2] re zhig na ko sa la'i rgyal po gsal rgyal gyi mas dben( ] D; dbyen P) gyi nu bo rgyal bu gzhon nu na gu zhes bya ba de dri dang me tog gi phreng bas brgyan nas rgyal bo'i pho brang gi drung na mar song ba las de'i btsun mo zhig steng gi khang bzangs kyi thog nas me tog gi phreng ba bor ba dang | de'i lus la phog pa gzhan zhig gis mthong ngo |「或る時、コーサラ国王の異母弟にあたるカーラという名の王子がいたが、彼は香りのする花環を飾り、王宮近くで、〔王宮の〕下を行っていると、彼（プラセーナジット）の妻の一人が宮殿の屋上から花環を投げ、〔それが〕彼（カーラ）の体に落ちたのを或る者が目撃した。」

[T330b14–18] 後於異時勝光王有異母弟王子。名曰哥羅。整服香鬘具諸瓔珞。於王宅辺近城而過。王之内人在高楼上見哥羅去愛其美貌。便以花鬘遥擲王子。花堕肩上餘人共見。（西本[1935: 450]「後に異時に於て

クシェーメーンドラ本は、Divy の所伝に見られる「花環が王妃の手から落ち、カーラ太子の上に落ちた」という伝承を、次のように忠実に再現している。

**[Av-klp 14.30]**

salīlaṃ vrajantas tasya karmavātair iveritā |
kusumasrak papātāṃse rājapatnīkarāc cyutā || 14.30 ||

(30) 彼（カーラ）が浮かれた気分で歩いていると、恰も業という風に誘発されたかのように、花環が王妃の手を離れて落ち、〔カーラの〕肩に落ちた。

## プラセーナジット王の命令で手足を切られるカーラ太子

また、讒言を受けたプラセーナジット王が、太子の手足を切るよう命じる場面では、Divy、Av-klp の所伝は、それぞれ次のように述べている。

**[Divy 153.27–154.1]**

rājā prasenajit kauśalaś caṇḍo rabhasaḥ karkaśaḥ | tenāparīkṣya pauruṣeyāṇām ājñā dattā | gacchantu bhavantaḥ śīghraṃ kālasya hastapādāñ chindantu | evaṃ deveti pauruṣeyai rājñaḥ prasenajitaḥ kauśalasya pratiśrutya kālasya vīthīmadhye hastapādāś chinnāḥ |

コーサラ国王プラセーナジット王は残忍で、気性が荒く、粗暴であった。彼はろくに調べもしないで取り巻きの者達に命を下した。「さぁ、爾等は速やかにカーラの手足を切断せよ。」と。取り巻きの者達は、「かしこまりました。王様」とコーサラ国王プラセーナジットに答えて、街路の真ん中でカーラの手足を切断してしまった[14)]。

**[Av-klp 14.33–34]**

piśunaprerito rājā bhrātur īrṣyāviṣolbaṇaḥ |
chedam asyādideśāśu pāṇipādasya mūrcchitaḥ || 14.33 ||

nikṛttapāṇicaraṇaḥ kumāraḥ karmaviplavāt |
sa vadhyavasudhāśayī viveśa viṣamāpadam || 14.34 ||

(33) 中傷者達に促されて、〔プラセーナジット〕王は弟への妬みの毒に溢れんばかりに満たされ、正常な判断力を失って、彼（カーラ）の手足を切るよう、即座に命じた。
(34) 王子は業のもたらす不幸が訪れた結果、手足を切断されてしまった。彼は処刑場に横たわり、恐ろしい不幸に見舞われた。

いずれの所伝も、プラセーナジット王が、カーラ太子の手足を切るよう命令を下し、カーラ太子が手足を切られてしまったことを伝えている点は同じである。

---

勝光王に異母弟の王子あり名けて哥羅と曰へるが、整服香鬘に諸瓔珞を具し、王宅の辺、城に近きよりして過りしに、王の内人は高楼上に在りて哥羅の去るを見、其の美貌を愛して便ち花鬘を以て遥に王子に擲げしに、花は肩上に堕ちて餘人共に見たりき。」）

14)[D44a4–5; P41b3–4] rgyal po rnams ni ma brtags par byed pa yin pas des blon po rnams la shes ldan dag ngas rgyal bu gzhon nu na gu yongs su btang gis deng la rkang lag med par gyis shig ces bsgo( ] D; sgo P) ba dang | de dag gis de srang du khrid nas rkang lag med par byas te bzhags nas ...「王達は深くものを考えないので、彼は大臣達に、『私はカーラ太子を捨てるので、爾等は〔彼を〕今すぐ、手足なき者にせよ。』と命じた。そして彼等は彼（カーラ）を街路に引っ立てて行き、手足を切断して放置した。すると・・・」

[T330b20–21] 王聞造次初不詳審。即令大臣刖其手足。彼承王教将詣市中。令魁膾者截其手足。（西本[1935: 450]「王聞いて造次に初より詳審せずして、即ち大臣をして其手足を刖らしめしに、彼れ王教を承けて将ゐて市中に詣り。魁膾者をして其手足を截らしめぬ。」）

## カーラ太子のもとから退散する外道

六師外道達が、カーラ太子の親族から、太子の四肢を元に戻すよう請われる場面の記述は、それぞれ次の通りである。

**[Divy 154.4–8]**

pūraṇādāyaś ca nirgranthās taṃ pradeśam anuprāptāḥ | kālasya jñātibhir abhihitam | etam āryāḥ kālaṃ rājakumāraṃ satyābhiyācanayā yathāpaurāṇaṃ kurudhvam iti | pūraṇenābhihitam | eṣa śramaṇasya gautamasya śrāvakaḥ śramaṇadharmeṇa gautamo yathāpaurāṇaṃ kariṣyati |

すると、プーラナを始めとする出家者達がその場にやって来た。カーラの身内の者達は言った。「聖者様。ここにいるカーラ太子を、真実を訴え求める力に基づいて元通りにして下さい[16]。」と。プーラナは言った。「この者は沙門ガウタマの声聞である。ガウタマは沙門の法を用いて、元通りにするだろう。」と[15)]。

**[Av-klp 14.35–38]**

tīvravyathāparivṛtaṃ śocadbhir mātṛbandhubhiḥ |
dadṛśus taṃ kṣapaṇakāḥ kṣaṇaṃ nayanacālanāḥ || 14.35 ||

tān samabhyetya śokārtās te rājasutabāndhavāḥ |
jagadus tatparitrāṇalubdhāḥ sarvapraṇāminaḥ || 14.36 ||

---

[15)][D44a6–7; P41b5–6] ci tsam na mu stegs can rnams kyang phyogs der 'ongs pa dang | de dag la de'i gnyen rnams kyis( ] D; kyi P) 'phags pa rgyal bu gzhon nu na gu'i yan lag dang nying lag dag ji ltar snga( ] D; mang P) ma kho bzhin du 'gyur ba'i bden pa'i tshig mdzad du gsol zhes smras pa dang | de dag spobs pa med nas cang mi zer bar langs te dong ngo |「その時、外道達もそこに向かってやって来た。〔そして〕彼（カーラ）の友人達は彼等に『聖者様、カーラ太子の手足が以前の通りになるような真実語をどうか発して下さい。』と述べた。すると、彼等は臆病風に吹かれて、無言で立ち上がって去って行ってしまった。」

[T330b23–26] 時有外道在傍直過。王子諸親請外道曰。哥羅王子被王所瞋截其手足。仁等頗能以実語力令此王子所截手足平復如故耶。外道聞已黙然無対。（西本 [1935: 450–451]「時に外道あり傍に在りて直ちに過れるに、王子が諸親は外道に請ひて曰く、「哥羅王子は王に瞋られて其手足を截られぬ、仁等頗し能く実語力を以て、此王子の截られし手足をして平復して故の如くならしむや（不や）。」外道聞き已るに黙然して対ふるなかりき。」）

---

[16]"satyābhiyācanayā" の解釈は難しい。当該箇所の先行訳を見ると、Burnouf [1876] は "appel à la vérité de votre croyance"（貴方方の信ずるところの真理への呼び掛け）、宮治 [1979] は「信仰の真理に訴えて」、平岡 [2007] は「真実〔語〕に訴えて」と解釈しており、Edgerton は、当該個所の蔵漢訳『有部律』の訳語 "bden pa'i tshig "、「実語力」に基づいて、"satyavacana" と同意と解釈し、"with appeal to truth" の訳語を充てている（BHSD s.v. "abhiyācanā"）。しかし、いずれも語義を十分に分析した訳とは思われない。確定的ではないが、ここでは、"satyābhiyācanayā" を「発せられた言葉の意味内容を実現しようとする力に基づいて」という意味に理解し、"satyasya abhiyācanā" という genitive tatpuruṣa として「真実を訴え求める力に基づいて」と訳す方が、より意味の通った訳になると思われる。

「真実語」を指す言葉としては、一般に "satyavacana"、"satyakriyā" が用いられるが、"satyābhiyācanā" という語の用例は当該個所に限られ、かつ "abhiyācana" という語は単独では殆ど用いられないようである（筆者が見る限り、*Mahāvastu* 3.318.14 において「〔梵天の〕懇願」の意味で用いられているのみである）。そこで類義語である "satyopayācana" の用例を仏教文献中に見ると、当該個所と同じく、真実語を発する場面で用いられていることが知られる（*Avadānaśataka* 48.1–11）。また、"satyopayācana" という語は Böhtlingk が典拠に挙げているように、*Rāmāyaṇa* にも見られ、nikūlavṛkṣam āsādya divyaṃ satyopayācanam | abhigamyābhivādyaṃ taṃ kuliṅgāṃ prāviśan purīm || 2.62.12 || "They reached the venerable tree on the western bank, the heavenly Granter of Wishes, and after approaching it they entered the city of Kuliṅgā."(Robert P. Goldman's translation, emphasis mine) という形で、「願望を成就する〔者〕」の意味で用いられている。

尚、「真実語（satyakriyā、satyavacana）」が発せられる対象については、Minoru Hara, "Divine Witness," *Journal of Indian Philosophy* 37 (2009): 253–272 を参照されたい。

adoṣaṃ nigṛhīto 'yaṃ kālo nāma nṛpātmajaḥ |
sarvajñavādino yūyaṃ prasādo 'sya vidhīyatām || 14.37 ||

iti taiḥ prasaradbāṣpair arthyamānāḥ pralāpibhiḥ |
te maunino niṣpratibhā vailakṣyād anyato yayuḥ || 14.38 ||

(35) 苦行者達は、悲しむ母親や親族と共に、彼が激しい苦しみでいっぱいになっているのを目を動かして一瞥した。(36) その太子の親族達は、悲しみに苛まれ、彼等のもとへ行って、彼を救済することを切実に求め、全身全霊を尽くして平伏して言った。(37)「ここにいるカーラ太子が、罪もないのに罰を受けています。爾等は一切知者と称しているのですから、彼に恵みをお与え下さい。」(38) このように涙ながらに語る彼等に求められても、その愚か者達は困惑して黙った侭、よそに行ってしまった。

ここでも Divy、Av-klp の所伝は共に、カーラ太子の親族が太子の手足を元に戻すよう、外道に嘆願したにもかかわらず、外道達が嘆願を無視して去ってしまったことを伝えている。

## 手足を回復するカーラ太子

さて、手足を切り落とされたカーラ太子は、阿難長老が発した真実語の力で手足を取り戻すのであるが、これに相当する Divy の記述は次の通りである。

**[Divy 154.26–155.12]**

(I) evaṃ bhadantety āyuṣmān ānando bhagavataḥ pratiśrutya saṃghāṭīm ādāyānyatamena bhikṣuṇā paścācchramaṇena yena rājabhrātā kālas tenopasaṃkrāntaḥ | upasaṃkramya kālasya rājakumārasya hastapādān yathāsthāne sthāpayitvaivam āha | ye kecit sattvā apadā vā dvipadā vā catuṣpadā vā bahupadā vā yāvan naiva saṃjñino nāsaṃjñinaḥ tathāgato 'rhan samyaksambuddhas teṣāṃ sattvānām agra ākhyātaḥ | ye kecid dharmāḥ saṃskṛtā vāsaṃskṛtā vā virāgo dharmas teṣām agra ākhyātaḥ | ye kecit saṃghā vā gaṇā vā pūgā vā parṣado vā tathāgataśrāvakasaṃghas teṣām agra ākhyātaḥ | anena satyena satyavākyena tava śarīraṃ yathāpaurāṇaṃ bhavatu | sahābhidhānāt kālasya rājakumārasya śarīram yathāpaurāṇaṃ saṃvṛttam |

(II) yathāpi tatra buddhasya buddhānubhāvena devatānāṃ ca devatānubhāvena kālena kumāreṇa tenaiva saṃvegenānāgāmiphalaṃ sākṣātkṛtam ṛddhiś cāpi nirhṛtā | tena bhagavata ārāmo niryātitaḥ | sa bhagavata upasthānaṃ kartum ārabdhaḥ |

(I)「かしこまりました。尊者よ。」と阿難長老は世尊に返答し、袈裟を受取って、後輩の沙門比丘の一人と一緒に王弟カーラのもとへ行った。〔カーラのもとへ〕行ってから、カーラ太子の手足を元通りに戻して、次のように言った。「衆生は無足の者であれ、二足の者であれ、四足の者であれ、多足の者であれ、・・・乃至・・・意識なき者達であれ、意識ある者達であれ、如来、阿羅漢、正等覚者はその衆生のうちで最上者と言われる。諸法は有為であれ、無為であれ、離欲がそれら〔諸法〕のうちで最高法だと言われる。僧団は、集団であれ、集合であれ[17]、会合であれ、如来の声聞

[17]Cowell & Neil の校訂本では、相当する語は "yugā" となっているが、これでは意味が通じない。これに相当する蔵漢訳『有部律』の記述を見ると、それぞれ、"'dus pa'm | mang po'm | tshogs pa'm | 'khor gang su ..." (D44b5; P42a4)、「所有大衆群類聚集」(T330c8–9) となっており、Vaidya の刊本 (Darbhanga, 1959) は "yugā" を "pugā" としている。ここではそれに従い、"yugā" を "pugā" と読む。

の僧団がそれら〔僧団〕のうちで最高であると言われる。この真実、真実語によって爾の体が元通りとなるように。」と述べるや否や、カーラ太子の身体は元の如くとなった。

(II) 丁度、仏陀の持っている仏陀の力で、神々の持っている神々の力で、〔不還果を直証し、神通力を手に入れる〕ように、カーラ太子はまさにその厭離心で不還果を直証し、神通力を手に入れた。彼は世尊に園林を寄進し、世尊に仕えるようになった[16]。

クシェーメーンドラ本においても、Divy の (I)–(II) に相当する記述を、第 39–40 詩節にそれぞれ等しく見ることができる。

---

[16]ここでも蔵漢訳『有部律』の原典は Divy のそれと逐語的には一致しないが、(I)–(II) に相当する箇所は等しく見られる。

[D44b7–45a5; P42a6–42b5]

(I) tshe dang ldan pa kun dga' bos btsun pa de ltar 'tshal lo zhes bcom ldan 'das kyi ltar mnyan nas de'i gnyen(] D; mnyan P.) rnams kyis yan lag dang nyid lag gnas ji lta ba bzhin du bzhag nas 'di ltar bden pa'i tshig bya bar brtsams te | bden pa dang bden pa'i tshig gang gis sems can rkang med pa dang zhes bya ba nas | gang su yang rung de dag gi nang na 'phags pa dgyes pa'i tshul khrims mchog tu gsungs pa'i bden pa dang bden pa'i tshig des de yan lag dang nying lag snga ma kho bzhin du gyur cig ces bya ba'i bar snga ma bzhin du byas pa dang | bden pa'i tshig gis de'i yan lag dang nying lag ji ltar snga ma bzhin du gnas par gyur nas skye bo'i tshogs kyis ngo mtshar du gyur pa'i mig phye ste | a la la 'phags pa kun dga' bos mu stegs can pham par byas so zhes smra bo che bton to |

(II) de nas tshe dang ldan pa kun dga' bos rgyal bu gzhon nu na gu khrid nas bcom ldan 'das ga la ba der song ste phyin nas bcom ldan 'das kyi zhabs la mgo bos phyag 'tshal te phyogs gcig tu 'dug go | phyogs gcig tu 'dug nas tshe dang ldan pa kun dga' bos bcom ldan 'das la 'di skad ces btsun pa rgyal bu gzhon nu na gu de ni 'di lags so zhes gsol pa dang | de nas rgyal bu gzhon nu na gus bcom ldan 'das kyi zhabs la mgo bos phyag 'tshal te phyogs gcig tu 'dug go | bcom ldan 'das kyis de'i bsam pa dang | bag la nyal dang | khams dang | rang bzhin thugs su chud nas de dang 'tsham pa'i chos bstan pa mdzad do | rgyal bu gzhon nu na gus de thos ma thag tu bden pa mngon par rtogs te phyir mi 'ong ba'i 'bras bu mngon du byas shing rdzu 'phrul yang thob par gyur to |

(I)「阿難長老は「尊者よ、かしこまりました。」と世尊に返答した。それから、彼の友人達は手足を元の場所に置いて、次のように真実語を発し始めた。「真実と真実語によって衆生は無足であれ、・・・(中略)・・・およそどのような者であれ、それらの中で、聖なる者に喜ばれる品行が最上であると言われる、その真実と真実語によって、彼の手足は以前の如くとなれ。」と言うと、以前の如くとなった。そして、真実語によって彼の手足は元の如くとなると、群衆は驚きの目を見開いた。「あぁ、聖者阿難は外道を調伏せり。」という大きな声が上がった。」

(II)「それから阿難長老はカーラ太子を連れて、世尊のいる所へ行き、〔世尊のもとへ〕着いてから、世尊の足に頭をつけて跪き、一方に坐した。一方に座してから、阿難長老は世尊に「尊者よ、かのカーラ太子とはこの者です。」と述べた。そして、カーラ太子は世尊の足に頭をつけて跪き、一方に坐した。世尊は彼の性格と性向と気質と自性を理解し、それに相応した法を教示した。カーラ太子はそれを聞くや否や真実をはっきりと理解し、不還果を直証し、神通力も得た。」

[T330c13–25]

(I) 時阿難陀聞仏説已。白言。世尊。当如是作。礼仏足已即便往彼哥羅之処。令其眷属以彼手足如旧安置。時阿難陀如仏所教。以実語請之作如是説所有衆生無足二足等。広如上説。乃至清浄聖戒最為第一。此之聖言無虚妄者。即可令此王子哥羅所断手足平復如故。作是語已王子手足即便平復。時諸人衆見是事已。悉皆踊躍出大音声歎未曾有尊者阿難陀勝諸外道。

(II) 即将王子往詣仏所。礼双足已在一面立。白言。世尊大徳。此是王子哥羅。於時王子亦礼仏足在一面坐。爾時世尊順其根性意楽差別而説法要。王子聞法証不還果并得神通。

西本 [1935: 451–452]

(I)「時に阿難陀は仏説を聞き已るに白して言さく、「世尊、当に是の如くに作すべし」。仏足を礼し已りて即ち便ち彼哥羅の処に往き、其眷属をして彼手足を以りて旧の如くに安置せしめ、時に阿難陀は仏所教の如くに実語を以て之を請じて是の如きの説を作さく、「所有衆生の無足・二足・・・・・・等、広く上に説けるが如し・・・・・・乃至、清浄聖戒は最も第一たり。此の聖言にして虚妄なからんには、即ち可しく此王子哥羅が断たれし手足をして、平復せんこと故の如くならしむべけん」と。是語を作し已るに王子が手足は即ち便ち平復せり。時に諸人衆は是事を見已りて悉く皆踴躍し、大音声を出して歎ずらく、「未曾有なり、尊者阿難陀は諸の外道に勝れり」と。

**[Av-klp 14.39–40]**

atha tena pathāyāto bhikṣuḥ sugataśāsanāt |
ānando vidadhe 'ṅgāni tasya satyopayācanāt || 14.39 ||

rājaputras tu saṃjātapāṇipādaḥ prasannadhīḥ |
jinaṃ śaraṇam abhyetya tadupasthāyako 'bhavat || 14.40 ||

(39) さて、善逝の命令に従い、比丘阿難はその道を通って〔カーラのもとへ〕やって来て、真実を訴え求める力に基づいて彼の四肢を元に戻した。(40) そして、太子は手足を生じたので、心の澄んだ者となり、勝者を身の寄せ場とし、彼に仕える者となった。

以上から、クシェーメーンドラ本はその内容が聊か索然としてはいるものの、「花環の取得」、「手足の切断」、「外道の退散」、「真実語による手足の回復」という、Divy 系伝本が伝えるカーラ太子譚の輪郭を正確に伝えていることが知られる。

### 0.4.3 三法帰依を説く世尊

更に、Av-klp と Divy 系伝本には、夜叉に脅かされて逃げ去る外道達に、世尊が三法帰依を説く場面を等しく見ることができる。すなわち、以下の通りである。

**[Divy 164.7–16]**

(I) bahavaḥ śaraṇaṃ yānti parvatāṃś ca vanāni ca |
ārāmāṃś caityavṛkṣāṃś ca manuṣyā bhayavarjitāḥ ||
(II) na hy etac charaṇaṃ śreṣṭhaṃ naitac charaṇam uttamam |
naitac charaṇam āgamya sarvaduḥkhāt pramucyate ||
(III) yas tu buddhaṃ ca dharmaṃ ca saṃghaṃ ca śaraṇaṃ gataḥ |
āryasatyāni catvāri paśyati prajñayā yadā ||
(IV) duḥkhaṃ duḥkhasamutpannaṃ nirodhaṃ samatikramam |
āryaṃ cāṣṭāṅgikaṃ mārgaṃ kṣemaṃ nirvāṇagāminām ||
(V) etad vai śaraṇaṃ śreṣṭham etac charaṇam uttamam |
etac charaṇam āgamya sarvaduḥkhāt pramucyate ||

(I) 多くの人々は恐怖に脅かされると、山や森、園林や霊場の木々を身の寄せ場とする。(II) 実に、その身の寄せ場は最高ではなく、その身の寄せ場は無上ではない。その身の寄せ場に依拠して一切の苦しみから解放されることはない。(III)–(IV) しかし、仏、法、僧団を身の寄せ場とした者が、智慧を以て、苦と〔苦の〕生起と〔苦の〕滅と〔苦の滅のための〕道[18]、すなわち、涅槃に赴く者達にとって平穏なる聖八正道と

(II) 即ち王子を将ゐて仏所に往詣し、双足を礼し已りて一面に在りて立ち、白して言さく、「世尊大徳、此は是れ王子哥羅なり」。時に王子も亦仏足を礼して一面に在りて坐せり。爾の時世尊は其根性・意楽の差別に順じて而し法要を説きたまふに、王子は法を聞いて不還果を証し并に神通を得たりき。」

[18]BHSD によれば、"samatikrama" は "mārga" と同義とあるが、平岡 [2007: 298, fn. 80] は該当箇所を蔵訳の対応語（sdug bsngal yang dag 'das pa dang）、漢訳の対応語（超衆苦）に従い、b 句を "duḥkhasamatikramam" に修正すべきであるとする。

いう[19]、四聖諦を観ずるならば、(V) 実に[20]、その身の寄せ場は最高であり、その身の寄せ場は無上であり、その身の寄せ場に依拠すれば、一切の苦しみから解放される。

以上に対応するクシェーメーンドラ本の記述は次の通りである。

**[Av-klp 14.58–59]**

uddiśya tān atha kṛpārdratayā śaraṇyaḥ
sarvopadeśaviṣayān bhagavān babhāṣe |
bhūbhṛdvanāvaninadīvivarādi sarvaṃ
tene bhayeṣu śaraṇaṃ kila kātarāṇām || 14.58 ||

buddhiṃ prabodhamayadhāmni nidhāya buddhaṃ
dharmaṃ sasaṃgham api ye śaraṇaṃ prapannāḥ |
teṣāṃ jagatkṣayabhayeṣv api nirbhayāṇāṃ
naivānyataḥ śaraṇadainyaparigraho 'sti || 14.59 ||

(58) さて世尊は、憐みの気持ち故に温和な心を抱く者であったので、身の寄せ場に相応しい者であった。〔彼は〕教示されるべき者達である彼等皆に言った。「山や森、大地や河、洞穴を始めとする一切のものは、恐怖に怖気づく者達に身の寄せ場を与えると言われている。(59) 悟りという拠り所に心を定め、僧団を含め仏と法という身の寄せ場を得た者達、彼等は世界の破滅に対する恐れを抱いていたけれども、最早恐れを抱くことがなく、他に比して〔仏、法、僧団という〕身の寄せ場が貧しいものだという理解を決して抱くことがない。」

クシェーメーンドラ本には、Divy 系伝本との若干の語彙の相違こそあれ、Divy の (I) に見られる「恐怖に怯える者達が山や森を拠り所にする」という記述、及び (III)–(VI) に見られる「三宝帰依」に関する記述を、それぞれ、第 58 詩節 cd 句、第 59 詩節 ab 句に含む点では、Divy 系伝本と同じである。

### 0.4.4 有身見を捨てる民衆

また上記の他、クシェーメーンドラ本が有部の伝承に基づいていたことを示唆する記述として、２に示した要素 (l)「有身見を捨てる民衆」を挙げることができる。相当するクシェーメーンドラ本の記述は次の通りである。

**[Av-klp 14.55]**

ityādibhir bhagavataḥ pravibhaktadīpta-

[19]cd 句の「涅槃に赴く者達に楽をもたらす聖八正道」を Burnouf [1876: 166] は “la voie formée de huit parties, voie sublime, salutaire, qui mème au Nirvāṇa” (涅槃に導く八つの部分から構成された道、すなわち、崇高で善なる道)、宮治 [1979: 139] は「涅槃に至る　寂静なる八つの聖なる道なり」と解釈する。これに対し平岡 [2007: 298, fn. 81] は “kṣema” は “nirvāṇa”「涅槃」と結び付きの強い語であるとして、相当する蔵訳 (mya ngan 'das bder 'gro ba yi)、漢訳（知八支聖道　趣安穏涅槃）の記述を根拠に原文を “kṣemanirvāṇagāminām” に改めるべきであるという解釈をとる。

[20]Cowell & Neil の校訂本では、a 句は “etac charaṇaṃ śreṣṭham” となっており、韻律に抵触する。そこで相当する箇所の蔵漢訳『有部律』の記述を見ると、蔵訳は “ni” (D52a5; P49b2)、漢訳は「必因此帰依　能解脱衆苦」(T333a10) とあり、強調を意味する不変化詞が挿入されるべきであることが知られる。Vaidya は不変化詞 “vai” を補っており、ここではその読みに従った。

jñānair vivekavimalaiḥ kuśalopadeśaiḥ |
vajrair ivāśu dalaśaḥ prayayau janasya
satkāyadṛṣṭimayaviṃśatiśṛṅgaśailaḥ || 14.55 ||

(55) 以上のような、金剛杵にも似た、世尊の善についての教示によって、人々の有身見から成る二十の峰を持つ山々は[21]、忽ち砕け散った。〔彼の教示は〕卓越した輝く智慧を備え、辯別能力によって煩悩の汚れを離れていた。

この詩節の対応箇所は、Divy には見られないが、蔵漢訳『有部律』の所伝には、クシェーメーンドラ本と挿入箇所を異にするものの[22]、以下のような形で、クシェーメーンドラ本とほぼ同内容のものを見ることができる。

**[D48a4–6; P45b2–4]**
bcom ldan 'das kyis de rnams kyi bsam pa dang | bag la nyal dang | khams dang | rang bzhin mkhyen nas 'phags pa'i bden pa bzhi rtogs par 'gyur ba de lta bu'i chos bstan pa mdzad pa dang | de rnams kyis de thos nas 'jig tshogs la lta ba'i ri'i rtse mo nyi shu mtho ba ye shes kyi rdo rjes bcom nas rgyun du zhugs pa'i 'bras bu mngon sum du byas so |

世尊は彼等の性格と性向と気質と自性を理解し、四聖諦を認識させる、彼等に相応しい法を教示した。彼等はそれを聞くや、二十の山の峰の突き出た有身見という山を智慧の金剛杵で砕き、預流果を直証した。

**[T331c15–17]**
爾時世尊依彼根性随機差別。順四諦理而為説法。彼聞法已以智金剛杵摧二十薩迦耶見山獲預流果[17)]。

クシェーメーンドラ本、蔵漢訳『有部律』にそれぞれ見られる「二十の山の峰に似た有身見を智慧の金剛杵で砕く」という表現は、平岡 [2002: 208] が指摘するように、有部の文献に固有な定型表現である[23]。クシェーメーンドラ本がこの定型表現を保持していることは、クシェーメーンドラが本章を著すに当たり、『根本説一切有部律』の伝承を参照していたことを意味している。

---

[17)]西本 [1935: 455]「爾の時世尊は彼が根性に依り機の差別に随ひて、四諦の理に順じて而し為に法を説きたまひ、彼は法を聞き已るに智金剛の杵を以て二十薩迦耶見の山を摧きて預流果を獲たりき。」

[21]二十の有身見とは、以下を指す。「色は我である。主の如く（rūpam ātmā svāmivat）」、「我は色をもつ。装飾具の如く（rūpavān ātmā alaṃkāravat）」、「色は我に属する。従者の如く（ātmīyaṃ rūpaṃ bhṛtyavat）」、「我は色に存在する。器の如く（rūpe ātmā bhājanavat）」、「受は我である（vedanātmā）」、「我は受をもつ（vedanāvān ātmā）」、「受は我に属する（ātmīyā vedanā）」、「我は受に存在する（vedanāyām ātmā）、「想は我である（sāṃjñātmā）」、「我は想をもつ（saṃjñāvān ātmā）」、「想は我に属する（ātmīyā saṃjñā）」、「我は想に存在する（saṃjñāyām ātmā）」、「行は我である（saṃskārā ātmā」、「我は行をもつ（saṃskāravān ātmā）」、「行は我に属する（ātmīyāḥ saṃskārāḥ）」、「我は行に存在する（saṃskāreṣv ātmā）」、「識は我である（vijñānam ātmā）」、「我は識をもつ（vijñānavān ātmā）」、「識は我に属する（ātmīyaṃ vijñānaṃ）」、「我は識に存在する（vijñāne ātmā）」。

[22]クシェーメーンドラ本では有身見に関する記述が化仏場面の後に入るのに対し、蔵漢訳『有部律』では化仏場面の前に入る。また、クシェーメーンドラ本では有身見を捨てる人物が「民衆」（jana）であるのに対し、蔵漢訳『有部律』では「仙人（drang srong）」（D48a4; P45b2; T331c14）である。

[23]この定型句の用例、及び対応する Skt. については、平岡 [2002: 183–184, 208] を参照されたい。

## 0.5　有部の伝承と一致しない要素

以上に見たように、クシェーメーンドラ本はDivy系伝本に固有な伝承や定型句をDivy系伝本と共有している。この事実を踏まえるならば、クシェーメーンドラが自身の「舎衛城神変説話」の種本として、有部の伝承を参照していたと見て間違いない。しかし以上を以て、クシェーメーンドラ本の源泉資料を有部の伝承だけに求めることはできない。何故なら、クシェーメーンドラ本は、中川 [1982] が指摘する以下のDivy系伝本の要素を全て欠いているからである。

(i) 「如来の必須事としての神変顕示」（Divy 150.15–26; D42b5–7; P40a5–7; T329c26–330a2）
(ii) 「過去仏の神変を思念する世尊」（Divy 147.22–25; D42b7–43a1; P40a7–8; T330a3–4）
(iii) 「仲間を求める外道」（Divy 151.19–153.20; D43a3–44a2; P40b2–41b1; T330a9–330b14）
(iv) 「神変を示すことを申し出る仏弟子」（Divy 159.20–160.18; D48b3–49b3; P46a2–46b8; T331c27–332a13）
(v) 「双神変」（Divy 160.1–11; D49b7–50a4; P47a5–47b1; T332a21–26）
(vi) 「黄門に出会うプーラナと娼婦に出会う外道」（Divy 164.26-165.14, 165.16–166.2; D52b6–53a3, 53a7–53b4; P50a3–7, 50b5–8; T333a27–333b13, 333b23–333c8）
(vii) 「自殺するプーラナ」（Divy 165.14–15; D53a3; P50a7–8; T333b13–14）

また、クシェーメーンドラ本は世尊が起こした神変の一つとして、２に挙げた要素 (g)「如意樹化作」（v. 42）を以下のように述べる点で、我々の注意を惹く。

**[Av-klp 14.42]**
upaviṣṭe nṛpe tatra saha kṣapaṇakādibhiḥ |
kalpavṛkṣīkṛtā bhūmir abhavat sugatecchayā || 14.42 ||

苦行者等と一緒に、〔プラセーナジット〕王がそこに入ると、善逝は意欲によって、大地を如意樹となした。

この伝承はDivy系伝本には見られないが、岡本 [2008] が指摘するように、非Divy系のパーリ及び『四分律』、『賢愚経』の所伝には、非常に近い伝承を見ることができる。パーリ二伝本の所伝は次の通りである。

**[Ja 264.30–265.5]**
(I) satthā paṭiggahetvā tatth' eva ekamante nisinno paribhuñjitvā "ānanda, imaṃ aṭṭhiṃ uyyānapālassa imasmiṃ ṭhāne ropanatthāya dehi, esa gaṇḍambo nāma bhavissatīti" āha. thero tathā akāsi.
(II) uyyānapālo paṃsuṃ viyūhitvā ropesi. taṃ khanaṃ ñeva aṭṭhiṃ bhijjitvā mūlāni otariṃsu, naṅgalīsappamāṇo rattaṃkuro uṭṭhahi, mahājanassa olokentass' eva paṇṇāsahatthakkhandho paṇṇāsahatthasākhā ubbedhena ca hatthasatiko ambarukkho sampajji.

(I) 師は〔マンゴ樹の実を〕受け取って、まさにその場所で、一方に坐して食べてから、「阿難よ、この種を園林の園丁に、この場所に植え付ける由申し伝えて渡しなさい。これは、ガンダンバという名の木となるであろう。」と述べた。〔阿難〕長老はその通りにした。
(II) 園林の園丁は、土を除けて、〔マンゴ樹の種を〕植え付けた。すると忽ち、種を破って、根を下ろし、鋤の柄のような大きさをした赤い芽が生じた。実に沢山の人々が

見ている中、幹は50ハスタあり、枝は50ハスタある、高さにして100ハスタのマンゴ樹が生じた。

**[Dhp-a 207.8–207.14]**

(I) satthā ambapānakaṃ pivitvā gaṇḍaṃ āha: "imaṃ ambaṭṭhiṃ idh' eva paṃsuṃ viyūhitvā ropehī" ti. so tathā akāsi.

(II) satthā tassa upari hattaṃ dhovi, hatthe dhotamatte yeva naṅgalasīsamattakhandho hutvā ubbedhena paṇṇāsahattho ambarukkho uṭṭhahi, catūsu disāsu ekekā uddhaṃ ekā ti pañca mahāsākhā paṇṇāsapāṇṇāsahatthā va ahesuṃ.

(I) 師はマンゴ樹の実の飲料を飲んで、ガンダに言った。「このマンゴ樹の種を、まさにこの場所に、土を除けて植え付けなさい。」と。

(II) 彼はその通りにした。師はその〔種を植え付けた場所の〕上で手を洗った。手を洗うや否や、鋤の柄程の大きさの幹をした、高さにして50ハスタのマンゴ樹が現われ、それぞれ、四方に四本が、一本が上向きに、というように、それぞれが50ハスタある、五本の大きな枝が生じた。

パーリ二伝本は、それぞれ(II)に示したように、世尊の神通力により、彼が食したマンゴ樹の種子が、一瞬にして大樹となったことを述べている。また、これに対応する『四分律』及び『賢愚経』の記述は、次の通りである。

**[四分律 949a5–7]**

時有檀越次供日者授仏楊枝。世尊為受嚼已。棄著背後。即成大樹根茎枝葉扶疎茂盛[18)]。

**[賢愚経 362c8–11]**

臘月一日。仏至試場。波斯匿王。是日設食。清晨躬手授仏楊枝。仏受嚼竟。擲残著地堕地便生。蓊欝而起。根茎踊出。高五百由旬。枝葉雲布[19)]。

以上から、クシェーメーンドラ本とパーリ二伝本、漢訳二伝本の所伝は、樹名を異にする点を除いて、等しく世尊が神通力を用いて、樹を化作したことを述べていることが知られる。

更に、Divy系伝本が全て(vii)「黄門に出会うプーラナと娼婦に出会う外道」(viii)「自殺するプーラナ」という要素を含むのに対し、岡本[2008]; Tucci [1949]が指摘するように、Av-klpの所伝はその要素を欠いている[24]。これに相当するクシェーメーンドラ本の記述は次の如くである。

**[Av-klp 14.60–61]**

durvāre paralokatīvratimire dharmaḥ pravṛddho 'ṃśumān
dānaṃ duḥsahapāpatāpavipadām abhyudgame vāridaḥ |
prajñā mohamahāprapātaviṣamaśvabhre karālambanaṃ
dainyākrandavihīnam eva śaraṇaṃ sarvatra puṇyaṃ nṛṇām || 14.60 ||

iti timiravṛtākṣṇāṃ cakṣurunmīlanārhaṃ
daśanamaṇimarīcivyajyamānaprakāśam |

18)境野[1933: 1221]「時に檀越あり、次供の日に、仏に楊枝を授く。世尊為めに受け、嚼し已りて背後に棄著す。即ち大樹を成し、根茎枝葉扶疎として茂盛す」

19)赤沼・西尾[1930: 111]「臘月一日仏試場に至る。波斯匿王、是の日、食を設け、清晨躬ら手にて仏に楊枝を授く。仏、受け嚼み竟る。残を擲ち地に著く、地に堕ち便ち生ず、蓊欝として起り根茎踊り出づ。高さ五百由旬枝葉雲布す」

24Giuseppe Tucci, *Tibetan Painted Scrolls*, vol. 2 (Roma, 1949), 458.

sadasi sugatacandraḥ śuddhadharmopadeśaṃ
sthirapadam iva kṛtvā kānanaṃ svaṃ jagāma ‖ 14.61 ‖

(60)「法は来世をもたらす、避け難く恐ろしい暗闇（無知）に対する、〔光を照らす〕遍満せる太陽である。布施は耐え難い悪業から生じる熱の苦しみという災いの生起に対する、〔熱を和らげる〕雨雲である。智慧は迷妄という巨大な断崖と恐ろしい穴に対する、〔人を引き上げる〕救いの手である。人々とってはいかなる所でも、福徳は、〔そこで人々が〕惨めさの故に泣き喚くことのない身の寄せ場に他ならない。」(61) 以上のように、月のような善逝は、眼病で目を覆われた者達の眼を開かせ、歯という宝珠の発する光線で光を顕示する、清浄なる法の教示をなして、自分の園林へと戻って行った。〔彼は〕群衆の心に深く足を踏み入れていたかのように見えた。

つまり、クシェーメーンドラ本は、外道の顛末を第 61 詩節 cd 句において、「世尊が法を説き、改心させた」としているのである。外道の顛末を明かさないのは、パーリの Ja の所伝と共通するが、「外道を改心させた」という点では、「外道が邪見を捨てるに至った」とする『仏本行経』の所伝の結末に類似している[25]。

以上の点から、クシェーメーンドラ本には、有部系と非有部系という、少なくとも相異なる二系統の伝承が併存していることが知られる。そこで、クシェーメーンドラ本の源泉資料について、以下の二つの仮説が立てられるだろう。

(1) クシェーメーンドラが自身の「舎衛城神変説話」著すに当たって用いた種本には、既に有部系と非有部系の少なくとも二つの伝承が混在しており、クシェーメーンドラはその種本の内容を忠実に再現した。
(2) クシェーメーンドラは自身の「舎衛城神変説話」著すに当たり、その大部を有部系の伝承に依りつつ、部分的に非有部系の伝承を取り入れていた。

仮説 (1)、すなわち、二伝承の併存がクシェーメーンドラの所産ではないと見る仮説は、クシェーメーンドラが、Av-klp において「プラバーサ王物語」という並行する内容の説話を、第一章 Pravāsāvadāna と第 100 章 Puṇyaprabhāsāvadāna という二つの章で扱っていることによって間接的に裏付けられる。何故なら、彼が折衷主義的な性格の詩人であれば、並行話をわざわざ二つの章を用いて改稿する筈がないからである。また、「舎衛城神変説話」に限って見ても、先述のように、『根本説一切有部律』の所伝と Divy の所伝には、逐語的に一致する部分と一致しない部分が確認されるので、クシェーメーンドラが Av-klp を著した時点まで、「舎衛城神変説話」の均一な伝承が、改竄や内容付加を免れて保たれていたとは考え難い。

しかし、仮説 (2) については、より有力な証拠がある。すなわち、Av-klp 第 64 章 Sudhanakinnaryavadāna には、『根本説一切有部薬事』の並行話と共通する要素と、ハリバッタ（Haribhaṭṭa、五世紀）の *Jātakamālā* の並行話に共通する要素の二つが確認されることを Straube [2006: 30–35] が指摘している。また、Av-klp 第 24 章 Viśvantarāvadāna では、Cone & Gombridge [1977] が指摘するように、主人公 Viśvantara の父の名が、冒頭部では有部の伝えるものと全く異なるのに対し、帰結部では有部の伝えるものと全く同一のものに代わっていることが知られる[26]。この二つは、仮

[25][仏本行経 86c21]「諸外異学　捨外邪見」。この点は岡本 [2008] によって指摘されている。

[26]Margaret Cone & Richard Gombrich, *The Perfect Generosity of Prince Vessantara: A Buddhist Epic translated from the Pali and illustrated by unpublished Paintings from Sinhalese Temples* (Oxford, 1977), xxxix 参照。当該章において、このような矛盾を生じた理由として、クシェーメーンドラの用いた種本が断片的なものであり、その不足部分を補うべく彼が別系統の伝本を用いたという可能性が考えられる。しかし、以上は筆者の憶測の域を出るものではない。

説 (2) の有力な証左となり得る。従って、クシェーメーンドラ本「舎衛城神変説話」の源泉資料として、有部系伝本と非有部系伝本の少なくとも二つの伝本を想定して大過ないと思われる。

## 0.6 結論

クシェーメーンドラ本「舎衛城神変説話」の源泉資料について、本考察から導かれる結論は次の通りである。

- クシェーメーンドラ本の内容は大筋で Divy、『根本説一切有部律』の所伝の内容に一致し、また有部の伝承にのみ固有な伝承を含んでいる点から、クシェーメーンドラが有部系の伝承を参照していたことは明らかである。
- しかし、クシェーメーンドラ本には、有部の伝承に相反する、有部の伝承には見られない記述も見出される。このことは、彼が作品を著すに当たり、複数の伝本を参照していたことを示唆する。

## 0.7 Av-klp 第 14 章 Prātihāryāvadāna 試訳

### 0.7.1 使用した原典

以下に Av-klp 第 14 章 Prātihāryāvadāna の和訳を試みる。底本として用いたのは、次の刊本の原典である。

- *Avadāna kalpalatā: A Collection of Legendary Stories about the Bodhisattvas by Kṣemendra, with its Tibetan Version called rtogs brjod dpag bsam 'khri shing by Shongton Lochāva and Paṇḍita Lakṣmīkara. Now first edited from a Xylograph of Lhasa and Sanskrit Manuscripts of Nepal*, Ed. Sarat Chandra Das and Paṇḍit Hari Mohan Vidyābhūṣaṇa, 2 vols, Calcutta: Baptist Mission Press, 1888-1918, vol. 1, pp. 410–429. (Bibliotheca Indica)

この刊本の原典を底本とした理由は、当該刊本が写本に基づく原典を提供しており、文献学的観点から見て、最も信頼性が高いことによる。刊本としては、この他に P. L. Vaidya が 1959 年に Buddhist Sanskrit Series 22–23 として出版したものがあり、正書法（orthography）や誤植などに若干の改善が見られ、教本としての価値は高いと思われる。しかし、Das が付した写本の異読とチベット訳が全て削られており、また根拠を全く提示せず Das の刊本に訂正を加え、しばしば Das の刊本に比べ劣った読みを提示している箇所が多々見られることから[27]、文献学的な用途には適さない。従って、本訳では、Das の *editio princeps* における明らかな誤植部分についてのみ、Vaidya の刊本を参照した。

また、Das の *editio princeps* に対する本文批判（de Jong [1996]）、及び以下の蔵訳を参照した[28]。

- Tibetan Tripiṭaka sDe ge Edition (D) #4155 [Khe 132a5–138b6] – Tibetan & Sanskrit.
- Brockprint of the *Bodhisattvāvadānakalpalatā* (ダライラマ五世版、Z) Tōhoku #7034 [124a4–130a4] –Tibetan & Sanskrit.
- Tibetan Tripiṭaka Peking Edition (P) #5655 [Ge 73a8–77a2] –Tibetan only.
- Tibetan Tripiṭaka Ganden Edition (天津古籍版、G) [Ge 84b2–89a2] –Tibetan only.
- Tibetan Tripiṭaka Narthang Edition (N) #3646 [Ge 66b5–69b4] –Tibetan only.

上記のうち、デルゲ版及びダライラマ五世版は、チベット文字で音写された梵文原典とそのチベット訳を含み、北京、ガンデン、ナルタンの三版は、チベット訳のみから構成されている。Das が *editio princeps* に用いたのは、このうちのダライラマ五世版のみである。チベット訳の読みは、ごく一部の例外を除いて、概ねデルゲ版系統（ダライラマ五世版）と北京版系統（ガンデン、ナルタン版）の二系統に分かれ、二系統に分かれる異読が全異読（67 箇所）中の 83.6% を占め、更に些細な筆写上の異読を除くと[29]、90.6% を占める。この事実は、四版本に二つの祖形伝本を想定する Straube[2006: 89–92] の見解を裏付ける。また、本訳ではチョーネ版を校合に用いなかったが、それは Straube[2006: 78–79] が提示する以下の理由による。すなわち、(1) チョーネ版の読みが例外なくデルゲ版の読みより劣った読みを保持していること、(2) チョーネ版の貝葉番号数と頁組みが常に正確にデルゲ版のそれに一致すること、この二点から、チョーネ版がデルゲ版の純粋な子世代の版本に属することが明らかな為である。

[27]Cf. **39ab** pathāyāto ] Ed; yathāyāto Vaidya. **53b** śāmyasukhaṃ ] Ed; sāmyasukhaṃ Vaidya.

[28]Das の *editio princeps* における諸問題点については、Marek Major, *Kṣemendra's Bodhisattvāvadānakalpalatā: Study and Materials* (Tokyo, 1992), 5–8 を参照されたい。

[29]Cf. **12b** de ] ZPGN; da (orig. de) D. **19d** thob ] D; thong (orig. thob) Z; mthong PGN. **33a** phra mas ] DZGN; pra mas (orig. phra mas) P. **49d** sar ] ZPGN; ser (orig. sar) D. **54c** khyim ] ZPGN; khyam (orig. khyim) D.

### 0.7.2 和訳にあたって

和訳に際しては、梵文原典、チベット訳を挙げ、相当する和訳を記した。原典を挙げるのは、読者が原典と和訳の対応を吟味する作業を容易にするためである。梵文、チベット訳原典の後には、それぞれの異読を示した。異読の表記は、採用した読みに“ ] ”記号を付し、後に採用しなかった読みを校訂本、写本の順に記した。“Σ”は該当する写本（校訂本を含む）以外の全ての写本、或いは校訂本の読みがその読みを支持することを意味する。正書法に起因する異読、内容上重要とは考えられない異読（scribal error）については、混乱を避けるべく、これを逐一挙げることはしなかった。動植物、鉱物名については同定を避け、便宜的な訳語或いは片仮名音写に依った。サンスクリット文献に頻出する蓮華、睡蓮の呼称については、Rau [1954] に従った[30]。

本訳はあくまで試訳である。推定に基づいて原典の読みをかえた部分については、なるべく根拠を提示したが、原典批判の観点から見て、不適切な個所も多々見られることかと思う。御叱正を請う次第である。

## 和訳

## 0.1 主題提示・帰敬偈

[D132a5; Z124a3]
yaḥ saṃkalpapathāpi naiva carati projjṛmbha[D132b1]māṇādbhutaḥ
svapnair yasya na saṃgatiḥ paricayo yasminn apūrvakramaḥ |
vāṇī maunavatī ca yatra hi nṛṇāṃ yaḥ śrotranetrātithis
taṃ nirvyājajanaprabhāvavibhavaṃ mānair ameyaṃ namaḥ || 14.1 ||

**1a** saṃkalpapathāpi naiva ] Ex conj. de Jong; saṃkalpapathā sadaiva Ed; saṃkalpapathāsi naiva (orig. saṃkalpapathāpi naiva) DZ. || -adbhutaḥ ] Ex conj. de Jong; -adbhutaṃ Σ.

[D132a6; Z124a4; P73a8; G84b2; N66b5]
| gang zhig rtog pa'i lam du 'ng rgyu ba [P73b1] nyid min rmad byung rab tu [D132b2] 'phel dang ldan |
| rmi lam gyis kyang gang dang 'grogs min gang la yongs 'dris sngon chad med pa'i rim |
| gang la mi rnams tshig ni mi smra nyid dang gang zhig rna ba mig gi mgron |
| sgyu med skye bo'i mthu ni 'byor pa tshad kyis gzhal bya min pa de la bstod | 14.1 |

**1a** rtog pa'i ] DZ; rtag pa'i Σ. || rmad ] DZ; smad Σ. **1d** sgyu ] conj.; rgyu Σ.

その御方は、〔自身から〕奇跡が生まれても、妄想の道を進むことは決してない。その御方は夢とは結び付かず、その御方には次々と新しい方法での〔神通力の〕行使の繰り返しがある。その御方には沈黙の言葉があり、実に、その御方は人々の耳と目にとっての客人である。その御方は、咎なき人々の為の神通力を宿しており[1]、〔その御方を〕量りで量ることはできない。〔その御方に〕帰命し奉る。

[30]Wilhelm Rau, “Lotusblumen,” in *Asiatica Festschrift Friedrich Weller* (Wiesbaden, 1954), 505–513.

[1]“nirvyāja-”「咎なき」に相当する語を Tib. は “rgyu med”「原因のない」としている。“sgyu med (nirvyāja)” の明らかな誤りと考えられるので、“rgyu med” を “sgyu med” に修正する。

## 0.2 外道の挑戦

### 0.2.1 外道、世尊に嫉みを抱く

pure rājagṛhābhikhye [Z124b1] bimbisāreṇa bhūbhujā |
pūjyamānaṃ jinaṃ dṛṣṭvā sthitaṃ veṇuvanāśrame || 14.2 ||

| grong khyer rgyal po'i khab ces par | | [Z124b2] sa bdag gzugs can snying po yis |
| 'od ma'i tshal na bzhugs pa yi | | rgyal ba mchod pa mthong gyur nas | 14.2 |

**2c** yi ] DZ; yis Σ.

mātsaryaviṣasaṃtaptā mūrkhāḥ sarvajñamāninaḥ |
na sehire tadutkarṣaṃ prakāśam iva kauśikāḥ || 14.3 ||

| rmongs pa kun mkhyen nga rgyal can | | phrag dog dug gis rab gdungs pas |
| de yi khyad 'phags ma bzod de | | ka 'u shi kas snang ba bzhin | 14.3 |

**3b** gdungs ] DZ; brdungs Σ. **3d** ka 'u shi kas ] conj.; ko 'u shi kas DZ; kau shi kas Σ.

王舎城という名の都城の竹林精舎に滞在していた勝者が、ビンビサーラ王に供養されているのを見て、〔自分を〕一切知者だと思い込んでいる愚か者達は、嫉みという毒の熱に苛まれ、彼の卓越性に耐えられなくなった。恰も梟が光〔に耐えられない〕様に。

malinaiḥ svavināśāya parabhāgoditaiḥ sadā |
kriyate vāsaraspardhā śārvarais timirotkaraiḥ || 14.4 ||

| nub mor gyur pa'i rab rib tshogs | | dri ma can ni shar cha nas |
| 'char bar rtag tu nyin par la | | [N67a1] rang nyams bya slad 'gran par byed | 14.4 |

**4c** 'char bar ] DZ; 'char bas Σ.

夜の真っ暗な暗闇の集まりは、いつも自滅を求めて他者の領域に現れ出て、昼間と競争をなすのである。

### 0.2.2 外道ビンビサーラ王に申し出る

maskarī saṃjayī vairair ajitaḥ kakudas tathā |
pūraṇajñātiputrādyā mūrkhāḥ kṣapaṇakāḥ pare || 14.5 ||

| gnag lhas bu dang yang dag rgyal | | mi pham nog can de bzhin du |
| rdzogs byed gnyen gyi bu la sogs | | rmongs pa zad byed gzhan dag kyang | 14.5 |

ūcur nṛpatim abhyetya māramāyāvi[D133a1]mohitāḥ |
saṃgharṣadveṣadoṣeṇa dhūmenevāndhakāritāḥ || 14.6 ||

| bdud kyi sgyu mas rmongs byas shing | | 'gran 'dod [D133a2] zhe sdang skyon gyis ni |
| du bas bzhin du [G85a1] mun gtibs pas | | mi bdag la mngon phyogs nas smras | 14.6 |

マスカーリン、サンジャイン、アジタ、カクダ、及びプーラナ、ジュナーティプトラを始めとする、その他の愚かな苦行者達は、敵意を抱き[2]、恰も煙で目が見えなくなった人のように、マーラの幻力で迷いを生じ、競争心と憎しみという過失の故に、〔ビンビサーラ〕王のもとへ行って述べた。

eṣa sarvajñatāmānī vane yaḥ śramaṇaḥ sthitaḥ |
ṛddhiprabhāvo bhavatā tasyāsmākaṃ ca dṛśyatām || 14.7 ||

| nags na 'dug pa'i dge sbyong gang | | 'di ni kun mkhyen nga rgyal can |
| khyod kyis de dang nged rnams kyi | | rdzu 'phrul mthu ni blta bar byos | 14.7 |

**7c** nged ] DZ; de Σ.

「森の中に〔自分を〕一切知者であると思い込んでいる、このような沙門がおります。貴方は彼と我々の持つ神通力を御覧下さい。

ṛddhiprabhāvād yat kiṃcit janavyārādhanorjitam |
dṛśyate mahad āścaryaṃ prā[Z125a1]tihāryaṃ tad ucyate || 14.8 ||

**8b** janavyārādhanorjitam ] Ex conj. Tib. *mgu bar rab sbel ba*; janavyāvarjanorjitam Ed; janavyāvājanorjitam DZ.

| rdzu 'phrul mthu las gang cung zad | | skye bo mgu bar rab sbel ba |
| ngo mtshar che ba mthong gyur pa | | de dag [Z125a2] cho 'phrul zhes su brjod | 14.8 |

**8b** mgu bar ] DZ; mgu ba Σ.

神通力から生ずる偉大な奇跡が見られるもの、それは、およそどのようなものであれ、人々を満足させることができ[3]、神変だと言われます。

śaktiḥ saṃsadi yasyāsti prātihāryasya darśane |
asmākaṃ tasya vā rājan pūjyaḥ sa tu jagattraye || 14.9 ||

**9b** prātihāryasya ] DZ(de Jong); pratihāryasya Ed. **9d** pūjyaḥ sa tu ] Ex conj. de Jong; pūjāḥ santu Ed; pūjyas stu DZ.

| rgyal po bdag cag gam ni de | | mdun sar cho 'phrul ston pa yi |
| nus pa gang la yod gyur de | | 'gro ba gsum du mchod 'os 'gyur | 14.9 |

**9a** ni ] Σ; dang DZ.

王よ、彼か、もしくは我々か、群衆の面前で神変を示すことのできる者の方が、三界で供養されるべきです。」

[2]"vairair"「敵意を抱いて」に相当する訳語を Tib. は欠く。

[3]該当箇所を校訂本 通り読むと、「人々を分離する力のある」となり、意味が通じない。そこで該当箇所を Tib. "skye bo mgu bar rab sbel ba"「人の喜びを増大させる」に従い、"janavyārādhanorjitam" にかえて読む。"vyārādhana" は恐らく "ārādhana" と同意であろうが、PW 及び Schmidt, Nachtr には典拠が見られない。

### 0.2.3 ビンビサーラ王、外道の申し出を拒絶する

iti teṣām vacaḥ śrutvā taddarpavimukho nṛpaḥ |
uvāca vāñchā keyaṃ vaḥ paṅgūnāṃ girilaṅghane || 14.10 ||

| zhes pa de dag tshig thos nas | | mi bdag de dregs las phyir phyogs |
| smras pa khyed bsam 'di ci zhig | 'phye bo ri la 'dzeg par 'dod | 14.10 |

以上のような彼等の言葉を聞くと、〔ビンビサーラ〕王は、彼等の慢心を嫌悪して言った。「爾等は足の自由が利かないのに、山へ登ることをどうしてこのように切望するのか。

asamañjasam evaitat kā spardhāgneḥ pataṅgakaiḥ |
naitad vācyaṃ punarvādī mayā niṣkāsyate purāt || 14.11 ||

| [P74a1] 'di ni rigs min phye ma leb | | rnams kyis me la 'gran nam ci |
| 'di ni smra bar mi bya yang | | smra na bdag gis grong las 'byin | 14.11 |

そのことは全く持って不合理である。どうして火が蛾達と張り合ったりしようか。かようなことを述べてはならない。〔爾等がもし、このようなことを〕再度言えば、私は〔爾等を〕都城から追放しよう。」

iti rājñā guṇajñena pratyākhyātodyamāḥ khalāḥ |
prayayus te [D133b1] nirālambe lambamānā ivāmbare || 14.12 ||

| rgyal po yon tan shes pa yis | | de skad spro zhing bshad bas na |
| mi bsrun de dag [D133b2] mkha' la bzhin | | rten med par ni song bar gyur | 14.12 |

**12b** de ] Σ; da (orig. de) D. **12c** mi bsrun ] DZ; mi srun Σ; **12d** ni ] DZ; yang Σ.

このように、邪悪な者達は、善い性質を知る王によって〔自分達の〕努力をきっぱりと断られてしまったので[4]、恰も、〔何も〕支えることのできない虚空に依っているかの如く、彼等は去って行った。

bimbisāro narapatir mūrkhatāpakṣapātavān |
anyaṃ vrajāmo bhūpālam iti te samacintayan || 14.13 ||

| mi bdag gzugs can snying po 'di | | rmongs las phyogs su lhung gyur pas |
| sa skyong gzhan dag 'gro bya zhes | | de dag rnams kyis bsams par gyur | 14.13 |

**13c** gzhan dag ] DZ; gzhan can Σ.

「ビンビサーラ王は愚かさの故に贔屓をしているのだ。別の王のもとへ行こう。」と彼等は考えた。

[4]相当する Tib. "de skad spro zhing bshad bas na"「このように歓喜して述べられて」は Skt. と一致しない。

### 0.2.4 外道、プラセーナジット王に申し出る

atrāntare bhagavati śrāvastīm abhitaḥ purīm |
prāpte jetavanārāmaṃ diśaṃ tām eva te yayuḥ || 14.14 ||

**14d** diśaṃ tām ] Ex conj. de Jong; digantān Ed; digantām DZ.

| skabs der bcom ldan mnyan yod kyi | | grong khyer dang nye rgyal byed tshal |
| kun dga' ra bar byon par gyur | | phyogs de nyid du de dag song | 14.14 |

この間に、世尊は舎衛城近くのジェータヴァナの園林に到着した。〔すると〕彼等（外道達）はその方向目掛けて赴いて行った。

te prasenajitaṃ tatra prāpya kosalabhūpatim |
prātihārya[Z125b1]kṛtaspardhāṃ tām evāsmai nyavedayan || 14.15 ||

| de dag der phyin ko sa la'i | | sa [G85b1] yi bdag po gsal rgyal la |
| cho 'phrul rmad [Z125b2] byung 'gran pa ni | | de nyid kho na de la brjod | 14.15 |

**15b** gsal rgyal ] Σ; sa rgyal DZ.

彼等はそこで、コーサラ〔国〕王プラセーナジットのもとへ行って、〔ビンビサーラのもとで言ったのと〕全く同じ神変に関する競争のことを彼に述べた[5]。

### 0.2.5 プラセーナジット王、世尊に通告する

guṇāntarajño nṛpatis teṣām darpakṣayecchayā |
ṛddhisaṃdarśanotsāhād yayau bhagavato 'ntikam || 14.16 ||

| yon tan khyad shes mi bdag ni | | de dag dregs pa gzhom 'dod pas |
| rdzu 'phrul lta bar spro ba'i slad | | bcom ldan 'das kyi drung du song | 14.16 |

**16d** kyi ] DZ; kyis Σ.

王は〔何が〕非凡な美質であるかをわきまえており、彼等の高慢を砕くことを望んだので、〔外道達に〕神通を見せようとして、世尊のもとへ赴いた。

sa samabhyetya vinayāt praṇipatya tam abravīt |
bhagavan darpadalanaṃ tīrthyānāṃ kartum arhasi || 14.17 ||

| mngon du phyin te dul ba yis | | phyag 'tshal nas ni rab gsol pa |
| bcom ldan mu stegs rnams kyi ni | | dregs pa zhi bar mdzad [N67b1] par 'os | 14.17 |

彼は彼（世尊）のもとへ行って、恭しく頭を下げて言った。「世尊よ、どうか外道達の高慢を粉砕して下さい。

ṛddhispardhānubandhena tvatprabhāvadidṛkṣayā |
svaguṇaślāghayāsmākaṃ taiḥ karṇau badhirīkṛtau || 14.18 ||

[5]Tib. は a 句の "tatra (der)" を "prāpya (phyin)" の目的語と解したらしく、訳文に混乱を生じている。

| rdzu 'phrul 'gran pa'i nyer sbyor gyis | | khyod kyi mthu ni blta bar 'dod |
| de dag rang gi yon tan bsngags | | bdag cag rna ba 'on par 'byed | 14.18 |

**18a** nyer ] Σ; nye DZ.

〔外道達が〕爾の神通力を見ようという欲求から、〔爾との〕神通を競争した結果、彼等が自分の美徳を自慢するようになれば、我々は耳を閉ざすでしょう。

[D134a1] prakāśaya nijaṃ tejaḥ sajjanāvarjanam vibho |
tīrthyābhidhānām akhilaṃ prayātu pralayaṃ tamaḥ || 14.19 ||

| [D134a2] gtso bo dam pa mgu ba yi | | rang gi gzi brjid rab gsal mdzod |
| mu steg zhes pa ma lus pa'i | | mun pa brlag par rab tu thob | 14.19 |

**19a** yi ] Σ; yis DZ. **19d** thob ] D; thong (orig. thob) Z; mthong Σ.

師よ、自らの鋭光を御示し下さい。〔それは〕善き人々に恩寵を与えるものです。外道と呼ばれる者達の闇を、残らず滅ぼして下さい。」

### 0.2.6 世尊、プラセーナジット王を窘める

iti rājavacaḥ śrutvā nirvikāro mahāśayaḥ |
bhagavān viratāmarṣaḥ saharṣas tam abhāṣata || 14.20 ||

**20d** saharṣas ] Ed(de Jong); pagarṣas (orig. saṃgharṣas?) DZ, Tib. translates *'gran bzhed* (saṃgharṣas).

| de skad rgyal po'i tshig thos nas | | bsams pa chen po rnam 'gyur med |
| 'gran bzhed khro ba dang bral ba | | bcom ldan 'das kyis der bka' stsal | 14.20 |

**20b** bsams ] DZ; bsam Σ.

このような王の言葉を聞いて、世尊は、志高く、志操堅固であったので、怒ることなく、歓喜して彼に述べた。

rājan nānyopamardāya vivādāya madāya vā |
vivekābharaṇārho 'yaṃ kriyate guṇasaṃgrahaḥ || 14.21 ||

| rgyal po gzhan dag nyer gzhom dang | | rtsod dang rgyags pa'i phyir yang min |
| rnam dben rgyan du 'os pa yang | | yon tan 'di ni gzung bar bya | 14.21 |

**21c** yang ] DZ; yis Σ.

「王よ、ここに美徳の蓄積が実現されている。〔これは〕判断能力を飾りとする者に相応しいのである。〔美徳の蓄積は〕他者を謗り、口論し、驕りの気持ちを抱くことをもたらすのものではない。

mātsaryamalinaiḥ kiṃ tair vicāravigu[Z126a1]ṇair guṇaiḥ |
ye haranti parotkarṣaṃ spardhābandhaprasādhitāḥ || 14.22 ||

**22d** -prasādhitāḥ ] Ex conj. Tib. *rab bsgrubs* (de Jong); -prasāritāḥ Ed; -prasāritaḥ DZ.

| 'gran [P74b1] pa'i rgyu yis rab bsgrubs gang | | pha rol bsngags [Z126a2] 'phrog yon tan ni |
| phrag dog dag gi dri ma can | | rnam dpyad yon tan bral des ci | 14.22 |

**22a** bsgrubs ] Σ; bsgubs P.

妬みの心で汚れ、識別能力を欠いていれば、その美徳は何の意味を持とうか。そのような〔美徳〕は、競争心の顕示の為に実現され[6]、他者の卓越性を奪うのだから。

guṇācchādanam anyasya svaguṇena karoti yaḥ |
dharmas tenāpraśastena svayam eva nighātitaḥ || 14.23 ||

| gang zhig rang gi yon tan gyis | | gzhan gyi yon tan sgrib byed pa |
| bsngags par 'os pa min [G86a1] pa des | | rang nyid kho nas chos chud gson | 14.23 |

自己の美徳で他者の美徳を覆い隠す者、彼は称賛されることがなく、実に自らダルマを破壊する。

sadguṇānāṃ parīkṣaiva paravailakṣyakāriṇī |
ucitā na hi śuddhānāṃ tulārohaviḍamba[D134b1]nā || 14.24 ||

| yon tan dam pa yongs brtag nyid | | mchog tu skyengs par byed pa yin |
| gang phyir dag pa srang la ni | | gzhal ba'i tho 'tshams rigs [D134b2] pa min | 14.24 |

**24d** tho 'tshams ] D; mtho 'tshams PZ; mtho 'tsham GN.

〔他者の〕善い性質を考察することこそが、清浄なる者達に相応しい。〔自他の善い性質を〕比べることで、〔相手を〕からかうことは、他者をはずかしめることにつながるので、〔清浄なる者達に相応しく〕ない。

guṇavān api nāyāti yaḥ pareṣu prasannatām |
sa dīpahastas tatpātracchāyayā malinīkṛtaḥ || 14.25 ||

| gang zhig yon tan ldan na yang | | gzhan la rab dang nyid mi 'gyur |
| lag na mar me thogs de de'i | | snod kyi grib mas mun par byed | 14.25 |

**25b** rab dang ] Σ; rab dangs DZ.

美徳を備えていても、他者に対して清らかな心を抱かない者、彼は燈明を手にしていても、その鉢の影のせいで光にあたることがない。

loke ta eva sarvajñā vidmaḥ kim adhikaṃ vayam |
parābhimānābhibhavaprāgalbhyaṃ svaparābhavaḥ || 14.26 ||

---

[6]c 句を校訂本通り読むと、「競争心の顕示の為に展開され」となる。これでも論理的には理解可能であるが、de Jong が指摘するように、この読みは本来 "-prasādhitāḥ" であったものが、下付文字 "h", "ā" の脱落及び子音字 "d" と "r" の混同の結果生じた二次的な読みであると思われる。ここでは、de Jong の conjecture に従い、該当箇所を "-prasādhitāḥ" にかえて読む。尚、Tib. は "-ābandha-" に相当する語を "rgyu"「原因」(Skt. nibandhana) とする。

| de nyid 'jigs rten na kun mkhyen | | bdag gis lhag par ci zhig rig
| pha rol mngon khengs zil gnon par | | rtul ba brtan pas rang zil gnon | 14.26 |

**26b** gis ] DZ; gi Σ. || lhag par ] conj.; lhag pa DZ; lhag ma Σ.

世間では、彼等（外道達）こそが一切知者である。〔彼等が知る〕以上の何を我々が知り得ようか。他者に対して〔自分が勝っているという〕自惚れ、〔他者を〕貌視すること、〔他者に対し〕尊大に振る舞う行為は、自分の身を滅ぼす行為である。」

iti śrutvā bhagavataḥ praśamābhimataṃ vacaḥ |
bhṛśam abhyarthanāṃ rājā cakārāścaryadarśane || 14.27 ||

| de skad bcom ldan 'das kyis gsungs | | rab zhi mngon par bzhed thos nas |
| rgyal pos ngo mtshar bstan pa la | | mchog tu mngon par zhu ba byas | 14.27 |

このような、平和を望む世尊の言葉を聞いてもなお、王は〔世尊に〕奇跡を見せることを強く懇願した。

### 0.2.7　世尊と約束を交わすプラセーナジット王

tataḥ kṛcchrād bhagavatā kṛtābhyupagamo nṛpaḥ |
rājadhānīṃ yayau hṛṣṭaḥ saptāhāvadhi[Z126b1]saṃvidā || 14.28 ||

| de nas tshegs kyis bcom ldan gyis | | zhal bzhes mdzad pas mi yi bdag
| mgu bas zhag bdun dus btab ste | | rgyal po'i pho [Z126b2] brang song bar gyur | 14.28 |

**28a** tshegs kyis ] conj.; tshogs kyi D; tshes kyi Σ.

それ故、王は辛うじて世尊と約束を交わした。七日後の約束を得られたので、〔彼は〕喜んで、王宮に帰って行った。

## 0.3　カーラ太子譚

### 0.3.1　花環を手にするカーラ太子

asminn avasare bhrātā bhūmibhartur asodaraḥ |
cacārāntaḥpuropānte prāsādatalavartmanā || 14.29 ||

| skabs der sa yi bdag po yi | | ma gcig min pa'i spun zla zhig
| pho brang 'khor dang nye ba yi | | khang bzang gzhi yi lam nas rgyus | 14.29 |

**29a** bdag po yi ] Σ; bdag po yis DZ. **29c** yi ] D; yis Σ.

その時、王の異母弟が、後宮近くの御殿のテラスの下の道を通って歩いていた。

salīlaṃ vrajatas tasya karmavātair iveritā |
kusumasrak papātāṃse rājapatnīka[D135a1]rāc cyutā || 14.30 ||

| las kyi rlung gis bskyod pa bzhin | | rgyal po'i btsun mo'i lags nas 'phos |
| rtse dga' dang bcas 'gro ba de'i | | phrag par me [D135a2] tog 'phreng ba lhung | 14.30 |

彼（カーラ）が浮かれた気分で歩いていると、恰も業という風に誘発されたかのように、花環が王妃の手を離れて落ち、〔カーラの〕肩に落ちた[7]。

### 0.3.2 虚偽の申し立てを受けるプラセーナジット王

tasya vijñātadoṣasya doṣaṃ saṃbhāvya sākṣibhiḥ |
piśunāḥ kiṃvadantīṃ tāṃ cakrire rājagāminīm || 14.31 ||

| skyon ni rig par gyur pa de'i | | skyon [N68a1] rnams dbang pos bsal byas nas |
| phra ma mkhan gyis gtam de dag | rgyal po [G86b1] yis ni rtogs par byas | 14.31 |

**31b** bsal ] DZ; gsal Σ.

〔カーラを〕中傷する者達は、過失に気付いた彼を目撃した者達の〔話〕から、過失を想像して、その噂を王に知らせた。

chidram alpam api prāpya kṣudrāḥ sarvāpakāriṇaḥ |
dvijihvāḥ praviśanty eva prabhūnāṃ śūnyam āśayam || 14.32 ||

**32c** eva ] Ex conj. Tib. *nyid* (de Jong); āśu Ed; om. DZ.

| rje bo'i bsam pa stong par ni | | chung yang bu ga rnyed gyur nas |
| gnod pa kun byed lce gnyis pa | | phra ma rab tu 'jug pa nyid | 14.32 |

**32b** rnyed gyur nas ] Σ; rnyed par gyur DZ.

ほんの些細な弱点の穴でも、それを見つけては、実に全ての卑しい中傷者は、二枚舌で、権力者の空ろな心の中に、入り込んで行くのである。

### 0.3.3 カーラ太子の手足の切断を命じるプラセーナジット王

piśunaprerito rājā bhrātur īrṣyāviṣolbaṇaḥ |
chedam asyādideśāśu pāṇipādasya mūrcchitaḥ || 14.33 ||

| [P75a1] rgyal po phra mas bskul ba yis | | phrag dog dug rgyas rgyal gyur pas |
| spun zla'i lag pa rkang pa dag | myur du chod ces yang dag bsgos | 14.33 |

**33a** phra mas ] Σ; pra mas (orig. phra mas) P. **33b** rgyal ] DZ; brgyal Σ.

中傷者達に促されて、〔プラセーナジット〕王は弟への妬みの毒に溢れんばかりに満たされ、正常な判断力を失って、彼（カーラ）の手足を切るよう、即座に命じた。

[7]女性が男性に花環を投げる行為は、*Mahābhārata* のナラ王物語にも見られるように、男性に対する愛情表現とされるが、仏教徒の間では特別な意味合いを持ち、淫らな性的誘惑を示すものとされていたようである。Jonathan A. Silk, "Garlanding as Sexual Invitation: Indian Buddhist Evidence," *Indo-Iranian Journal* 50 (2007): 5–10.

nikṛttapāṇicaraṇaḥ kumāraḥ karmaviplavāt |
sa vadhyavasudhāśāyī viveśa viṣamāpadam || 14.34 ||

| lag pa rkang pa rnams bcad pa'i | | gzhon nu las kyis rnam bslad pas |
| gsod pa'i nor 'dzin la nyal te | | mi bzad rgud par zhugs par gyur | 14.34 |

**34b** las kyis ] Σ; las kyi DZ.

王子は業のもたらす不幸が訪れた結果、手足を切断されてしまった。彼は処刑場に横たわり、恐ろしい不幸に見舞われた。

### 0.3.4 カーラ太子のもとから退散する外道

tīvravyathāparivṛtaṃ śocadbhir mātṛbandhubhiḥ |
dadṛśus taṃ kṣapaṇakāḥ kṣa[Z127a1]ṇaṃ nayanacālanāḥ || 14.35 ||

**35d** nayanacālanāḥ ] Ex conj. Tib. *mig ni g.yo ba yi* (de Jong); nayanacālane Ed; om DZ.

| ma dang gnyen ni mya ngan can | | gdung ba drag pos yongs bskor te |
| skad cig mig ni g.yo ba yi | | zad byed rnams [Z127a2] kyis mthong bar gyur | 14.35 |

苦行者達は、悲しむ母親や親族と共に、彼が激しい苦しみでいっぱいになっているのを目を動かして一瞥した[8]。

tān samabhyetya śokārtās te rājasutabāndhavāḥ |
jagadus tatparitrāṇalubdhāḥ sarvapraṇāmi[D135b1]naḥ || 14.36 ||

**36c** -lubdhāḥ ] Ex conj. de Jong; -liptāḥ Ed; -luptāḥ DZ. **36d** -praṇāminaḥ ] Ex conj. de Jong; -prāṇinaḥ Σ.

| de ni yongs skyobs la chags shing | | kun la phyag 'tshal mya ngan gyis |
| gzir ba'i rgyal bu gnyen de rnams | | de dag la mngon phyogs [D135b2] nas smras | 14.36 |

**36a** skyobs ] Σ; bskyabs DZ.

その太子の親族達は、悲しみに苛まれ、彼等のもとへ行って、彼を救済することを切実に求め、全身全霊を尽くして平伏して言った[9]。

adoṣaṃ nigṛhīto 'yaṃ kālo nāma nṛpātmajaḥ |
sarvajñavādino yūyaṃ prasādo 'sya vidhīyatām || 14.37 ||

**37b** kālo nāma ] DZ(de Jong); kālanāmā Ed.

---

[8]デルゲ、ダライラマ五世版では c 句の末尾が欠落している。校訂本は "nayanacālane" と補っているが、これでは意味が通じない。de Jong は相当する Tib. "mig ni g.yo ba yi" に従い、"nayanacālanāḥ"「〔外道達は〕目を動かして」と補うべきであるとする。ここでは de Jong の修正案に従う。

[9]cd 句を校訂本通り読むと、「彼を救うことによって塗り付けられた、全ての気息を有する者達は述べた。」となり、全く意味が通じない。従って、該当箇所を Tib. に基づく de Jong の conjecture に従い、"jagadus tatparitrāṇasaṃlubdhāḥ sarvapraṇāminaḥ" にかえて読む。"-saṃlubdhāḥ" という読みについては、子音 "b" と "p", "d" と "t" の混同、及び下付文字 "h" の脱落で説明可能である。

| kā la zhes pa mi bdag bu | | skyon med 'di ni chad pas bcad |
| khyed rnams kun mkhyen smra ba po | | 'di la bka' drin bsgrub par mdzod | 14.37 |

**37d** mdzod ] DZ; mdzad Σ.

「ここにいるカーラ太子が、罪もないのに罰を受けています。爾等は一切知者と称しているのですから、彼に恵みをお与え下さい。」

iti taiḥ prasaradbāṣpair arthyamānāḥ pralāpibhiḥ |
te maunino niṣpratibhā vailakṣyād anyato yayuḥ || 14.38 ||

| de skad mchi ma rab zags shing | | rab smras de yis gsol btab pas |
| mthu med de dag mi smra zhing | | skyengs nas gzhan du song bar gyur | 14.38 |

このように涙ながらに語る彼等に求められても、その愚か者達は困惑して黙った侭、よそに行ってしまった。

### 0.3.5 真実語により手足を回復するカーラ太子

atha tena pathāyāto bhikṣuḥ sugataśāsanāt |
ānando vidadhe 'ṅgāni tasya satyopayācanāt || 14.39 ||

| de nas dge slong kun dga' bo | | bde gshegs bka' yis lam de nas |
| 'ongs te bden pa'i byin rlabs kyis | | de yi lus ni rnam par bsgrubs | 14.39 |

**39c** rlabs ] DZ; brlabs Σ.

さて、善逝の命令に従い、比丘阿難はその道を通って〔カーラのもとへ〕やって来て、真実を訴え求める力に基づいて、彼の四肢を元に戻した。

rājaputras tu saṃjātapāṇipādaḥ prasannadhīḥ |
jinaṃ śaraṇam abhyetya tadupasthāyako 'bhavat || 14.40 ||

| rkang lag yang dag skyes pa yi | | rgyal po'i bu yang dang pa'i blos |
| rgyal la skyabs su [G87a1] mngon song ste | | de yi nye gnas dag tu gyur | 14.40 |

**40a** yi ] Σ; yis DZ.

そして、太子は手足を生じたので、心の澄んだ者となり、勝者を身の寄せ場とし、彼に仕える者となった。

## 0.4 プラセーナジット王による神変舎建立

saptarātre vyatīte 'tha prātihāryagṛhaṃ mahat |
ṛddhiṃ bhagavato draṣṭuṃ mahīpatir akārayat || 14.41 ||

**41b** prātihāryagṛhaṃ ] conj.; śrāntihāryaṃ gṛhaṃ Ed; prātīhāryaṃ gṛhaṃ DZ; prātihāryaṃ gṛhaṃ Ex conj. de Jong, Tib. translates *rdzu 'phrul gyi ... khang pa* (prātihāryaṃ gṛhaṃ).

| de nas zhag bdun bzlas pa'i tshe | | bcom ldan 'das kyi rdzu 'phrul gyi |
| cho 'phrul blta 'dod sa bdag gis | | khang pa chen po byed du bcug 14.41 |

さて、七日が過ぎて、王は世尊の神通を見るべく、大きな神変舎を建立させた[10]。

## 0.5 神変を示す世尊

### 0.5.1 如意樹化作

upaviṣṭe nṛpe tatra saha kṣapaṇakādibhiḥ |
[Z127b1] kalpavṛkṣīkṛtā bhūmir abhavat sugatecchayā || 14.42 ||

| der ni zad byed pa sogs dang | | lhan cig mi bdag bzhugs pa la |
| [Z127b2] bde gshegs bzhed pas sa gzhi dag | dpal bsam shing gis brgyan par gyur | 14.42 |

苦行者等と一緒に、〔プラセーナジット〕王がそこに入ると、善逝は意欲によって、大地を如意樹となした[11]。

### 0.5.2 放光

tataḥ prāpte[D136a1]ṣu deveṣu draṣṭuṃ bhagavataḥ prabhām |
ratnapradīpaṃ bhagavān bheje siṃhāsanaṃ mahat || 14.43 ||

**43b** prabhām ] Σ, but Tib. translates *mthu* (prabhāvam?).

| de nas bcom [D136a2] ldan 'das kyi mthu | | lta ru lha rnams 'ongs pa'i tshe |
| bcom [P75b1] ldan 'das kyis seng ge'i khri | | rin chen rab 'bar che ba bsten | 14.43 |

**43c** kyis ] Σ; kyi DZ.

それから、世尊の〔放つ〕光輝を見ようとして、神々がやって来ると、世尊は宝珠の光を発する、大きな獅子座に坐した。

tejodhātuṃ prapannasya tasya gaṇḍasamudgataiḥ |
vyāptaṃ pāvakasaṃghātair abhūd bhuvanamaṇḍalam || 14.44 ||

| me yi khams la rab [N68b1] zhugs pa | | de yi 'gram pa las 'khrungs pa'i |
| me yi tshogs kyis srid pa yi | | dkyil 'khor dag ni khyab par gyur | 14.44 |

**44a** zhugs ] DZ; bzhugs Σ. **44c** kyis ] DZ; kyi Σ.

---

[10]校訂本では、b 句は "śrāntihāryaṃ gṛhaṃ mahat" となっており、全く意味が通じない。de Jong は相当箇所のデルゲ、ダライラマ五世版の音写、及び Tib. から、"prātihāryaṃ gṛhaṃ" という読みを提示し、"prātihāryaṃ" を b 句の "ṛddhiṃ" と同格と解し、bcd 句を「王は世尊の神通という神変を見るために、大きな家を建立させた」と理解すべきであるとするが、寧ろ、"prātihāryagṛhaṃ" と修正し、bcd 句を「王は世尊の神通を（ṛddhiṃ）見るべく、大きな神変舎を（prātihāryagṛhaṃ）建立させた」と解釈すべきであろう。

[11]相当する Tib. "dpag bsam shing gis brgyan par gyur"「如意樹で飾られた」は Skt. と正確に一致しない。

〔世尊が〕火光定に入ると、彼の頬から生じる炎の集まりで、地輪は遍充された。

śānte śanaiḥ kamalakānanasaṃnikāśe
vahnau samastabhuvanasthitibhaṅgabhītyā |
dehāt tato bhagavataḥ karuṇāmburāśeḥ
pūrṇāmṛtormivimalā rucayaḥ prasasruḥ || 14.45 ||

**45d** rucayaḥ ] Ex conj. Tib. *'od zer* (Vaidya); ruṇayaḥ Σ.

| srid par gnas pa mtha' dag 'jig pa'i 'jigs pas dal bu yis |
| pa dma'i tshal dang mtshungs pa'i me ni zhi bar gyur pa la |
| de rjes bcom ldan sku ni snying rje'i chu yi phung po las |
| bdud rtsi gang ba'i rba rlabs dri med 'od zer rab tu 'phros | 14.45 |

**45a** 'jig pa'i ] DZ; 'jigs pa'i Σ. || 'jigs pas ] DZ; 'jigs pa Σ. **45d** bdud rtsi ] Σ; bdud rtsis DZ.

〔世尊が〕一切世界の存続を破壊してしまうのではないかという危惧から、赤蓮華の叢にも似た火が徐々に鎮火すると、その後で、憐みの海である世尊の体から、甘露の波のように汚れのない、遍く行き渡る諸々の光が流れ出た。

lāvaṇyasārajitacandrasahasrakāntiṃ
tejaḥpratānaviphalīkṛtasūryacakram |
taṃ nāyakaṃ jananikāyavilocanāni
prītyā papuḥ sukṛtalabdham apūrvaharṣam || 14.46 ||

**46a** -sārajitacandra- ] Ex conj. de Jong; -sāramaticandra- Ed; –sārajiticandra- DZ. **46c** taṃ nāyakaṃ jana- ] Ex conj. Tib. *'dren pa de ni skye bo'i tshogs* (de Jong); taṃ nāganāyaka- Ed; taṃ nāganāyakā- DZ.

| stong phrag zla ba'i mdzes pa las rgyal mdzes pas khengs gyur cing |
| gzi brjid rab tu rgyas pas nyi ma'i 'khor lo 'bras med mdzad |
| 'dren pa de ni skye bo'i tshogs kyi rnam par lta byed kyis |
| legs byas kyis thob sngon med mgu zhing dga' bas 'thungs par gyur | 14.46 |

**46c** skye bo'i ] DZ; skye bo Σ. **46d** thob ] DZ; 'thob Σ.

群衆の目は、歓喜の故にその導師に釘付けになった。〔その導師は〕美の真髄で千の月の輝きに勝る者であり[12]、鋭光の広がりで日輪を無益なものとなす者であり、〔人々の〕善い行いで得られる者であり、未だ嘗てない喜びを与える者であった。

### 0.5.3 化仏

vaiḍūryanālavipulāruṇaratnapātra-
kāntollasatka[Z128a1]nakakesarakarṇi[D136b1]kāni |
abhyudyayuḥ kṣititalād atha tatsamīpe
padmāni saurabhabharāhṛtaṣaṭpadāni || 14.47 ||

[12]相当する Tib. "stong phrag zla ba'i mdzes pa las rgyal mdzes pas khengs gyur cing"「千の月の美に勝った美で満たされた」は Skt. と余り一致しない。

| chu ba bai ḍū rya ldan rin chen dmar po'i 'dab ma yangs |
| mdzes shing rab [Z128a2; G87b1] tu 'bar ba'i gser gyi [D136b2] ge sar ze 'bru can |
| rkang drug pa rnams dri bzang tshogs kyis 'bod pa'i pa dma ni |
| de nas de yi drung du sa gzhi dag las mngon 'khrungs gyur | 14.47 |

すると、彼の近くに、夥しい芳香で蜂を引き寄せる、瑠璃でできた茎と紅い宝珠でできた大きな葉で美しい、黄金でできた雄蕊と雌蕊を生じている蓮華が地表から現れた。

teṣūpaviṣṭam atha kāñcanacārukāntiṃ
snigdhekṣaṇaṃ sugatacakram adṛśyatārāt |
pīyūṣapeśalaśaśidyutiśītalena
yasyodayena sahasā sukham āpa lokaḥ || 14.48 ||

| de dag rnams la nye bar bzhugs pa'i bde gshegs 'khor lo ni |
| gser 'od mdzes shing 'jam pa'i spyan ldan de nas nye bar mthong |
| bdud rtsi mnyes gshin ri bong can 'od bsil bar gyur pa dag
| gang zhig shar bas 'jig rten dag gis 'phral la bde thob gyur | 14.48 |

**48b** spyan ] Σ; rgyan DZ.

そして、〔人々は〕愛情に満ちた目をした善逝達が、黄金のように美しい輝きを備えて、それら（蓮華）の上に座しているのを遠くから見た。彼等の出現による、甘露のような柔和さと、月光のような涼やかさによって、人々は急に楽を得た。

teṣāṃ prabhāvavibhavaṃ bhagavān babhāra
madhye 'dhikaṃ kanakaśaila ivācalānām |
suskandhabandhuraghanadyutisaṃniveśaḥ
prāṃśuḥ surakṣitiruhām iva pārijātaḥ || 14.49 ||

| de dag dbus na bcom ldan 'das ni mthu yi 'byor pa dag
| ri rnams dag las gser gyi ri bo bzhin du lhag par 'dzin |
| phrag pa legs mtho stug cing mdzes par yang dag gnas pa ni |
| lha yi sar skyes rnams las yongs 'du bzhin du rab tu [P76a1] mtho | 14.49 |

**49d** sar ] Σ; ser D.

世尊は恰も山々のうちの須彌山の如く、彼等（化仏された仏）のうちで、卓越した神通力の威力を保持していた。〔彼は〕その美しい肩で魅力溢れる体という、一群の輝きを備えており、神々の木々の中のパーリジャータ樹の如く、聳え立っていた。

### 0.5.4 世尊を讃える天界の神々

svargāṅganākarakuśeśayakīryamāṇair
amlānamālyavalayaiḥ kalitottamāṅgāḥ |

tasyānanāmbujavilokananirnimeṣāḥ
martyā api kṣa[D137a1; Z128b1]ṇam avāpur amartyabhāvam || 14.50 ||

**50c** -nirnimeṣāḥ ] conj.; -nirnimeṣe Ed; -nirnimeṣa DZ.

| mtho ris bu mo'i lags pas me tog rnams ni gtor gyur pa'i |
| mi dman 'phreng ba'i tshogs kyis yan lag mchog rnams rgyas gyur cing |
| de zhal chu skyes rnam par blta la mig ni 'dzum bral bas |
| mi rnams dag kyang [D137a2; Z128b2] skad cig mi yi dngos min thob par 'gyur | 14.50 |

**50c** blta ] DZ; lta Σ.

〔人々は〕天女の蓮華の花瓣のような手が散り撒く[13]、色褪せない花の環の集まりを頭に戴き[14]、彼（世尊）の蓮華のような顔を見つめようとして瞬きすることがなかったので[15]、〔彼等は〕死すべき者達であったにもかかわらず、一瞬の間不死なる状態を得たのだった。

vyomāṅganeṣu suradundubhiśaṅkhatūrya-
ghoṣāvṛtaḥ kusumavarṣamahāṭṭahāsaḥ |
gandharvakinnaramunīśvaracāraṇānāṃ
sphītaś cacāra bhagavatstutivādanādaḥ || 14.51 ||

**51a** vyomāṅganeṣu ] Ed; vyomāṅgaṇeṣa DZ, Tib. translates *mkha'i do rar* (vyomāraṅgeṣu).

| de nas lha yi rnga chen dung dang rnga sgras khyab gyur cing |
| me tog char pa gad rgyangs cher bzhad nam mkha'i do rar ni |
| dri za mi'am ci dang thub pa'i dbang phyug spyod rnams kyis |
| bcom ldan bstod pa'i tshig gi sgra ni bsgrags par gyur | 14.51 |

ガンダルヴァとキンナラ、聖仙や主宰神という天上の楽師が〔発する〕世尊を讃える言葉の音声は、天上世界で鳴り響き続けていた。〔その音は〕神々の太鼓と法螺と〔忉利天の〕天鼓の音に包まれており、〔その音と共に〕花の雨が降り、大きな高笑いの声も聞こえて来た[16]。

[13]"kuśeśaya"「蓮華」に相当する語を Tib. は "me tog"「花」とする。

[14]"kalita-"「備えた」「保持した」に相当する語を Tib. は "rgyas gyur cing"「満ちた」とする。

[15]校訂本では、該当箇所は-nirnimeṣe（処格、単数、男性）で終わっているが、これでは c 句の意味が句全体の中で浮いてしまう。相当する Tib. は "de zhal chu skyes rnam par blta la mig ni 'dzum bral bas"「彼の蓮華のような顔を見つめて目が瞬きしないので」という理由句としているので、この解釈に従って c 句末尾を "-nirnimeṣāḥ"（主格、複数、男性）にかえて、d 句の "martyā" に掛る限定句として解した。

[16]第 50–51 詩節に相当する記述は Divy の所伝にはないが、『根本説一切有部雑事』の所伝にはやや近い記述を見ることができる。

[D51a7; P48b5–6] de nas lha rnams kyis lha'i me tog u tpa la dang pa dma dang ku mu da dang pa dma dkar po dang man dā ra ba rnams gtor to | lha'i a ga ru'i phye ma dang | rga spos kyi phye ma dang | tsan dan gyi phye ma dang | lha rdzas gyi gos kyang gtor |

それから神々は、神々しい花々、つまり青睡蓮の花、白蓮華、クムダ蓮華、プンダリーカ蓮華と曼陀羅華を撒いた。〔そして彼等は〕神々のアガルの粉、タガラの粉、栴檀の粉と神々の衣までも散り撒いた。

[T332b29–c3] 時彼諸天於虚空中。奏諸天楽亦散衆花。所謂鉢頭摩花拘物頭花。分陀利花曼陀羅

### 0.5.5 法を説く世尊

tatrāruṇādharadalād daśanāṃśuśubhrād
vyākīrṇakeśarakulād vadanāravindāt |
satsaurabhaṃ bhagavataḥ svarasānivṛttaṃ
dhanyāḥ papur madhuravāṅmadhu puṇyasūtam || 14.52 ||

**52b** vadanāravindāt ] Ex conj. Tib. *zhal gyi pa dma* (vadanāravindāt?); daśanāravindāt Σ. **52c** svarasānivṛttaṃ ] conj.; svarasaṃnivṛttaṃ Σ, Tib. translates *rang nyams dang mthun* (svarasocitaṃ?). Cf. de Jong. **52d** puṇyasūtam ] Ed; puṇyasutam DZ, Tib. translates *bsod nams kyis gtsang* (puṇyapūtam). Cf. de Jong.

| der [N69a1] ni bcom ldan zhal gyi pa dma [G88a1] mchu yi 'dab dmar zhing |
| 'od zer dkar bas kun dkrigs so yi ge sar rdzogs pa las |
| bsod nams kyis gtsang shin tu dngar ba'i gsung gi sbrang rtsi ni |
| rang nyams dang mthun dam pa'i dri bzang skal dang ldan pas 'thungs | 14.52 |

**52b** dkrigs ] Σ; dkris DZ. **52c** dngal ba'i ] DZ; mngar ba'i Σ.

そこで、幸福なる者達は、世尊の顔という蓮華から発せられる、言葉という甘い蜜を飲んだ。〔その蓮華は〕紅い唇という葉を備え、歯の光という白さを宿し、毛髪という花糸の集まりをちりばめ、〔その蜜は〕本来の味を失っておらず[17]、善き芳香を放ち、福徳からもたらされるものであった。

pāpaṃ vimuñcata niṣiñcata puṇyabījaṃ
vairaṃ parityajata śāmyasukhaṃ bhajadhvam |
jñānāmṛtaṃ pibata mṛtyuviṣāpahāri
neyaṃ tanuḥ kuśalakarmasakhī cirāya || 14.53 ||

| sdig pa'i tha ba thong la bsod nams dag gi sa bon thob |
| khon ni yongs su dor la zhi ba'i bde ba bsten par byos |
| 'chi ba'i dug ni nyams byed ye shes bsud rtsi 'thungs shig dang |
| dge ba'i grogs por gyur pa'i lus 'di ring por mi gnas so | 14.53 |

**53a** gi ] N; gis Σ. **53d** ring por ] Σ; ring po DZ.

悪〔い行い〕を捨てよ。福徳という種子を植え付けよ。憎しみを捨てよ。寂静の安楽を享受せよ。死という毒を除く智慧の甘露を飲め。この体は、長くは善業を友とし続けることはないのだから。

lakṣmīś calā taruṇatā [D137b1] ca jarānuyātā
kāyo 'py apāyanicayasya nivāsa eva |

---

花。以天沈水栴檀香米末及以諸香悉皆散布。以天妙衣及人間上服繽紛而下。（西本 [1930: 457]「時に彼諸天は虚空中に於て諸の天楽を奏し、亦衆花・・・所謂、鉢頭摩花・拘物頭花・分陀利花・曼陀羅花を散じ、天の沈水・栴檀の香米末及以諸香悉く皆散布し、天の妙衣及び人間の上服を以て繽紛として下せり。」）

尚、上記表現は、世尊が都城の敷居を跨いだ際に起こる未曽有法に関する『根本説一切有部律』の定型表現として用いられることが平岡 [2002: 178–180] によって指摘されている。

[17]相当箇所を校訂本及びデルゲ、ダライラマ五世版音写 Skt. に従って読むと、「音で停止した」、Tib. に従って読むと「本来の味に等しい」となり、意味が通じない。従って、相当箇所を "svarasānivṛttaṃ"「本来を失っていない」にかえて読む。

prāṇāḥ śarīrakakuṭīṣu muhūrta[Z129a1]pānthā
nityodaye kuruta dharmamaye prayatnam || 14.54 ||

**54b** nivāsa eva ] Ed (Tib. translates *gnas nyid gyur pa yin*); nikāya iva DZ; nikāya eva Ex conj. de Jong.

| dpal 'byor g.yo zhing lang tsho [D137b2] nyid kyang rga bar rjes su 'gro |
| lus kyang gnod pa'i tshogs rnams dag gi gnas nyid gyur pa yin |
| srog ni ngan pa'i lus kyi khyim gyi yud tsam mgron [Z129a2] yin pas |
| chos kyi rang bzhin rtag tu skyed la rab tu 'bad par mdzod | 14.54 |

**54c** khyim ] Σ; khyam (orig. khyim) D.

美は移ろい易く、若さは老いに従われる。身体もまた、諸々の不幸の住まう場所に他ならない[18]。命は、ちっぽけな身体という苫屋の暫しの旅人である。法を本質とする常なる幸福の為に努力せよ。

## 0.5.6 有身見を捨てる民衆

ityādibhir bhagavataḥ pravibhaktadīpta-
jñānair vivekavimalaiḥ kuśalopadeśaiḥ |
vajrair ivāśu dalaśaḥ prayayau janasya
satkāyadṛṣṭimayaviṃśatiśṛṅgaśailaḥ || 14.55 ||

**55c** dalaśaḥ prayayau janasya ] Ex conj. de Jong; dalanaṃ prayayau janānām Ed; dalāśaḥ prayayau jana DZ. **55d** -dṛṣṭimaya- ] conj.; -dṛṣṭisama- Ed; -dṛṣṭimama- DZ.

| de la sogs pas bcom ldan 'das kyis nyer bstan ye shes kyi |
| snang ba dri ma med pa dben zhing dge ba'i mthu stobs kyis |
| skye bo'i ngar 'dzin 'jig tshogs lta ba'i ri bo'i rtse mo ni |
| nyi shu rdo rjes [P76b1] bzhin du myur bcom rab tu zhi bar gyur | 14.55 |

**55a** sogs pas ] Σ; sogs pa'i DZ. **55b** dri ma med pa ] Σ; dri ma med pas D.

以上のような、金剛杵にも似た、世尊の善についての教示によって、人々の有身見から成る二十の峰を持つ山々は、忽ち砕け散った。〔彼の教示は〕卓越した輝く智慧を備え、辯別能力によって煩悩の汚れを離れていた。

## 0.5.7 茫然自失する外道

ṛddhiprabhāṃ bhagavataḥ pravibhāvya tīrthyā
mantrahatā viṣadharā iva bhagnadarpāḥ |

[18]該当箇所は Skt. と Tib. に解釈の違いが見られる。de Jong は前者に従い、"kāyo 'pi apāyanicayasya nikāya eva"「身体もまた、諸悪趣の集合に他ならない」という読みを提示するが、余り意味を捉えた解釈とは思われない。これに対し Tib. は "lus kyang gnod pa'i tshogs rnams dag gi gnas nyid gyur pa yin"「身体もまた、諸々の不幸（gnod pa!）の住する場に他ならない」という解釈をとっている。ここでは、後者の解釈に従って、このように訳す。

dīpā ivārkakiraṇapratibhābhibhūtāś
citrārpitā iva yayuś ciraniścalatvam || 14.56 ||

**56a** -prabhāṃ ] Ex conj. Vaidya; -prabhā Σ.

| rdzu 'phrul 'od ldan bcom ldan 'das kyi mthu stobs mu stegs rnams |
| sngags kyis bcom pa'i dug 'dzin bzhin du dregs pa nyams gyur cing |
| nyi ma'i 'od kyi mthu yis mar me bzhin du zil gyis mnan |
| yun ring g.yo ba med pa ri mo bkod pa bzhin du gyur | 14.56 |

**56a** stobs ] Σ; rtogs PN.

外道達は世尊の神通〔の〕光輝をつぶさに見て[19]、恰も呪文に打たれた毒蛇の如くに、驕りの心を砕かれた。〔彼等はまるで〕日光の輝きに打ち負かされた燈明のようであり、恰も絵に描かれた者達の如く[20]、長い間動きを失っていた。

## 0.6 夜叉の怒りを受ける外道

atrāntare bhagavataḥ satataṃ vipakṣān
sarvātmanā kṣapaṇakān avadhārya [D138a1] yakṣaḥ |
kṣiptapravātavṛtavarṣabharaś cakāra
vidrāvya randhraśaraṇān bhuvi vajrapāṇiḥ || 14.57 ||

**57a** vipakṣān ] Ex conj. de Jong; vipakṣaḥ Ed; vipakṣan DZ. **57b** kṣapaṇakān avadhārya ] Ex conj. de Jong; kṣapaṇako navadharma- Ed; kṣapaṇakan avadhārma DZ. **57c** kṣiptapravātavṛtavarṣabharaś ] conj.; kṣiptaśravān sa vṛtavarṣavaraiś Ed; kṣiptaśravātavṛtavarṣabharaiś DZ; kṣiptapravātavṛtavarṣabharaiś Ex conj. de Jong.

| skabs der gnod sbyin [G88b1] lag na rdo rjes zad byed pa rnams ni |
| bdag nyid kun gyis rtag tu bcom ldan 'das kyi [D138a2] mi mthun phyogs |

[19]"pravibhāvya"「つぶさに見て」に相当する語を Tib. は "mthu stobs（prabhāva）"「力」とする。

[20]動きを失った者を絵に描かれたものに喩える表現は、古典期以降のカーヴィアで頻繁に用いられた決まり文句であり、その典型的な例は Māgha（七世紀）の*Śiśupālavadha*（『シシュパーラの殺戮』）13.47 にも見ることができる。

[*Śiśupālavadha* 13.46–47]
abhiyāti naḥ satṛṣa eva cakṣuṣo
harir ity akhidyata nitambinījanaḥ |
na viveda yaḥ satatam enam īkṣate
na vitṛṣṇatāṃ vrajati khalv asāv api || Śiśu 13.46 ||

akṛtasvasadmagamanādaraḥ kṣaṇaṃ
lipikarmanirmita iva vyatiṣṭhata
gatam acyutena saha śūnyatāṃ gataḥ
pratipālayan mana ivāṅganāganaḥ || Śiśu 13.47 ||

女達は苦しんだ。というのも、クリシュナが、我々の眼差しが〔彼を〕熱望しているにもかかわらず、行ってしまったからである。「絶えず彼（クリシュナ）を目にしているこの者（ドヴァーラヴァティーの住人、或いはヨーガ行者）でさえも、断じて〔彼を見〕飽きることはない。」というようには〔かの愚かな女達は〕知ることがなかったのである。

一群の女達は、〔その心がクリシュナのもとに〕一瞬の間、留まっていた。〔彼女達は〕自分の家に戻りたいという望みも抱かず、心虚しくなり、恰も絵に描かれた者のようであり、クリシュナと共に発って行ってしまった心を待ちわびているかのようであった。

| yin par shes nas drag po'i rlung gis dkris pa'i char dag spros |
| rnam par rmongs nas sa yi khung bur skyabs pa dag tu byas | 14.57 |

**57a** rjes ] DZ; rje Σ. **57b** kyi ] DZ; kyis Σ. **57c** shes nas ] DZ; shes pas Σ. **57d** skyabs pa ] Σ; bskyabs pa DZ.

この間夜叉は、苦行者達が常に世尊に対立する者であることを完全に確認して、稲妻を手にして、大地めがけて嵐に包まれた夥しい量の雨を投げ落とし[21]、〔外道達を〕追い払い、洞穴を身の寄せ場にさせた。

## 0.7 三宝帰依を説く世尊

uddiśya tān atha kṛpārdratayā śaraṇyaḥ
sarvopade[Z129b1]śaviṣayān bhagavān babhāṣe |
bhūbhṛdvanāvaninadīvivarādi sarvaṃ
tene bhayeṣu śaraṇaṃ kila kātarāṇām || 14.58 ||

**58a** kṛpārdratayā ] Ex. conj. de Jong; kṛpārdrabhayā- Σ. **58c** -nadī- ] Ex conj. Tib. *klung* (de Jong); -manir Σ.

| de nas de dag la mtshon bcom ldan skyabs 'os snying rje yis |
| brlan par gyur pas [Z129b2] nye bar bstan pa kun gyi yul bka' stsal |
| ri dang nags dang sa dang klung dang khungs la sogs |
| 'di kun nges par sdar ma rnams kyi 'jigs la skyabs mi 'gyur | 14.58 |

**58c** klung ] Σ; rlung DZ.

さて世尊は、憐みの気持ち故に温和な心を抱く者であったので[22]、身の寄せ場に相応しい者であった。〔彼は〕教示されるべき者達である彼等皆に言った。「山や森、大地や河、洞穴を始めとする一切のものは[23]、恐怖に怖気づく者達に身の寄せ場を与えると言われている。

buddhiṃ prabodhamayadhāmni nidhāya buddhiṃ
dharmaṃ sasaṃgham api ye śaraṇaṃ prapannāḥ |
teṣāṃ jagatkṣayabhayeṣv api nirbhayāṇāṃ
naivānyataḥ śaraṇadainyaparigraho 'sti || 14.59 ||

**59a** prabodhamayadhāmni ] Ex conj. Tib. *rab tu sad pa'i rang bzhin gnas la*; prabodha mama dhāmni Σ.

---

[21]校訂本では、相当箇所は "kṣiptaśravān sa vṛtavarṣavaraiś" となっているが、これでは意味が通じない。そこで de Jong はこれを "kṣiptapravātavṛtavarṣabharaiś"「投げ落とされた、嵐に包まれた夥しい量の雨で」に修正し、夜叉が外道を追い払う手段を意味する具格として読むよう提案する。しかし、相当する Tib."drag po'i rlung gis dkris pa'i char dag spros"「強い風に包まれた雨を飛ばして」及び、d 句末の "yakṣaḥ"「夜叉」の限定句 "vajrapāṇiḥ"「稲妻を手にして」との対応を考慮するならば、夜叉の限定句として "kṣiptapravātavṛtavarṣabharaś"「〔夜叉は〕嵐に包まれた夥しい量の雨を投げ落とし」と読むべきであると思われる。

[22]デルゲ版、ダライラマ五世版音写 Skt. の読みは支持しないが、de Jong の conjecture に基づき、校訂本の "kṛpārdrabhayā-" を "kṛpārdratayā" に修正する。

[23]該当箇所を校訂本通り読むと、「山や森、大地や宝珠、洞穴を始めとする一切のものは」となり、「宝珠が拠り所を与える」という意味不明の文になる。de Jong は Tib. の訳語 "klung"「河」に基づいて "-nadī-" という読みを推定する。de Jong の推定を確定する用例はないが、ここでは氏の推定する読みに従い、「河」と訳す。

| rab tu sad pa'i rang bzhin gnas la blo gros bskyed byas nas |
| sangs [N69b1] rgyas chos dang dge 'dun bcas la gang zhig skyabs song ba |
| de dag 'gro ba 'jig pas 'jigs pa la yang 'jigs pa med |
| dman pa yongs 'dzin skyabs ni gzhan na yod pa nyid ma yin | 14.59 |

**59c** 'jig pas ] conj.; 'jigs pas D; 'jigs pa Σ.

悟りという拠り所に心を定め、僧団を含め仏と法という身の寄せ場を得た者達、彼等は世界の破滅に対する恐れを抱いていたけれども、最早恐れを抱くことがなく、他に比して〔仏、法、僧団という〕身の寄せ場が貧しいものだという理解を決して抱くことがない。

durvāre paralokatīvratimire dharmaḥ pravṛddho 'ṃśumān
dānaṃ duḥsahapāpatāpavipadām a[D138b1]bhyudgame vāridaḥ |
prajñā mohamahāprapātaviṣamaśvabhre karālambanaṃ
dainyākrandavihīnam eva śaraṇaṃ sarvatra puṇyaṃ nṛṇām || 14.60 ||

**60d** dainyākrandavihīnam ] Ex conj. de Jong; dainyākrāntamahīnam Ed; dainyākrāntavihīnam DZ.

| 'jig rten pha rol mi bzad mun pa zlog dkar chos ni rab rgyas tsha zer can |
| bzod dkar sdig pa'i gdung ba phongs pas mngon par [D138b2] bskyed par sbyin pa chu gter yin |
| mi bzad gti mug g.yang sa chen po'i gcong la shes rab lag pas 'chel ba ste |
| kun tu mi rnams kyi ni bsod nams kho na dman dang cho nge bral ba'i skyabs | 14.60 |

**60a** zlog ] DZ; bzlog Σ. **60b** bskyed par ] Σ; bskyed pa DZ; **60c** 'chel ] DZ; mchel Σ. **60d** kyi ] Σ; kyis DZ.

「法は来世をもたらす、避け難く恐ろしい暗闇（無知）に対する、〔光を照らす〕遍満せる太陽である。布施は耐え難い悪業から生じる熱の苦しみという災いの生起に対する、〔熱を和らげる〕雨雲である。智慧は迷妄という巨大な断崖と恐ろしい穴に対する、〔人を引き上げる〕救いの手である。人々とってはいかなる所でも、福徳は、〔そこで人々が〕惨めさの故に泣き喚くことのない身の寄せ場に他ならない。」

## 0.8 外道を改心させ、王舎城へ戻る世尊

iti timiravṛtākṣṇāṃ cakṣurunmīlanārhaṃ
daśanamaṇimarīcivyajyamānaprakāśam |
sadasi sugata[Z130a1]candraḥ śuddhadharmopadeśaṃ
sthirapadam iva kṛtvā kānanaṃ svaṃ jagāma || 14.61 ||

| de ltar rab rib kyis bsgribs mig can rnams kyi mig ni dbyer 'os shing |
| tshems kyi nor bu'i 'od zer dag ni rab gsal [P77a1] ldan pas gsal byas nas |
| mdun sar [G89a1] bde gshegs zla [Z130a2] bas dag pa'i chos ni nye bar bstan pa dag
| brtan par gyur pa'i gnas bzhin mdzad nas rang gi nags su gshegs par gyur | 14.61 |

以上のように、月のような善逝は、眼病で目を覆われた者達の眼を開かせ、歯という宝珠の発する光線で光を顕示する、清浄なる法の教示をなして、自分の園林へと戻って行った。〔彼は〕群衆の心に深く足を踏み入れていたかのように見えた。

iti kṣemendraviracitāyāṃ bodhisattvāvadānakalpalatāyāṃ prātihāryāvadānaṃ nāma caturdaśaḥ pallavaḥ ||

| zhes pa dge ba'i dbang pos byas pa'i byang chub sems dpa'i rtogs pa brjod pa dpag bsam gyi 'khri shing las cho 'phrul gyi rtogs pa brjod pa'i yal 'dab ste bcu bzhi pa'o |

以上、クシェーメーンドラによって著された『菩薩の偉業の如意の蔓草』における、神変アヴァダーナという名の第 14 章了。

## 略号及び参考文献[24]

### (1) 一次文献

**Av-klp** *Bodhisattvāvadānakalpalatā*
*Avadāna kalpalatā: A Collection of Legendary Stories about the Bodhisattvas by Kṣemendra, with its Tibetan Version called rtogs brjod dpag bsam 'khri shing by Shongton Lochāva and Paṇḍita Lakṣmīkara. Now first edited from a Xylograph of Lhasa and Sanskrit Manuscripts of Nepal.* Ed. Sarat Chandra Das & Paṇḍit Hari Mohan Vidyābhūṣaṇa. 2 vols., Calcutta: Baptist Mission Press, 1888-1918. (Bibliotheca Indica)

**de Jong** See de Jong 1996.

**Dhp-a** *Dhammapadaṭṭhakathā*
*The Commentary on the Dhammapada.* Ed. Harry Campbell Norman. 5 vols., London: Pāli Text Society, 1906–1915 .

**Divy** *Divyāvadāna*
*The Divyāvadāna: A Collection of Early Buddhist Legends.* Ed. Edward Byles Cowell & Robert Alexander Neil. Cambridge, 1886.

**Ja** *Jātaka*
*The Jātaka: Together with its Commentary being Tales of the Anterior Births of Gotama Buddha.* Ed. Viggo Fausbøll. 6 vols., London: Pāli Text Society, 1877–1896.

***Kumārasambhava***
*Vallabhadeva's Kommentar (Śāradā-Version) zum Kumārasambhava des Kālidāsa*, Ed. Mulakaluri Sriman Narayana Murti, Wiesbaden: Franz Steiner Verlag, 1980. (Verzeichnis der orientalischen Handschriften in Deutschland, Supplementband 20,1)

***Śiśupālavadha***
*Māghabhaṭṭa's Śiśupālavadha: With the Commentary (Sandeha-Viṣauṣadhi) of Vallabhadeva*, Ed. Ram Chandra Kak & Harabhatta Shastri, Shrinagar: Kashimir Mercantile Press, 1935.

### (2) 二次文献

**Burnouf, Eugéne 1876** *Introduction á l'histoire du Buddhisme indien.* Paris: Maisonneuve[2]. (Bibliothèque orientale vol. 3)

**de Jong, Jan Willem 1996** "Notes on the Text of the Bodhisattvāvadānakalpalatā," 『法華文化研究』22, 1–93.

**Straube, Martin 2006** *Prinz Sudhana und die Kinnarī: Eine buddhistische Liebesgeschichte von Kṣemendra Texte, Übersetzung, Studie.* Marburg: Indica et Tibetica Verlag. (Indica et Tibetica 46)

**赤沼智善・西尾京雄 1930** 『国訳一切経　本縁部七』大東出版社

**赤沼智善・江田俊雄・西尾京雄 1930** 『国訳一切経　本縁部十一』大東出版社

**岡本健資 2008** 「舎衛城における異教徒と仏弟子シャーリプトラの争い」（インド思想史学会第 15 回学術大会配布資料）

**境野黄洋 1933** 『国訳一切経　律部四』大東出版社

[24]略号表記については、原則以下に従った。Heinz Bechert, *Abkürzungsverzeichnis zur buddhistischen Literature in Indien und Südostasien insbesondere zu den Veröffentlichungen der Kommission für buddhistische Studien der Akademie der Wissenscheften in Göttingen* (Göttingen, 1988).

**中川正法 1982** 「舎衛城神変説話」（『印度学仏教学研究』30–2. pp. 657–658.）
**西本龍山 1935** 『国訳一切経　律部二十五』大東出版社
**平岡聡 2002** 『説話の考古学—インド仏教説話に秘められた思想—』大蔵出版
**平岡聡 2007** 『ブッダが謎解く三世の物語　—『ディヴィヤ・アヴァダーナ』全訳—』大蔵出版
**宮治昭 1979** 「Divyāvadāna 第 12 章 “Prātihāryasūtra” 和訳」（『文化紀要』13. pp. 117–141.）

（やまさき　かずほ，広島大学大学院［インド哲学］）